

---

# Emerging Disease

風月英

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Emerging Disease

### 【Nコード】

N3841C

### 【作者名】

風月英

### 【あらすじ】

根絶されたはずの脅威のウイルスAX-58。それに感染しながら生き残った少年、瞬と千代。別々の施設に隔離されていた二人が出合い、そして何かが変わっていく。…

## 1・Prologue

彼があのでウイルスに感染したのはいつだっただろうか。感染者が祈る間もなく死んでいった中、感染しつつも「生きている」そう判断されたのはいつだっただろう。そんな彼が他者への感染を危惧して人里離れた施設へ隔離されたのは…？それはもはや少年には思いつけない幼い頃。

公に「根絶された」と言われるAX-58ウイルス。今も少年の体内でひっそりと生き続けているそのウイルスは、感染者を生かした前例が無い。過去に爆発的に流行し、文字どおり巨大な爆発宜しく約六万人を殺した。それはわずか二週間の出来事。今、その話題を掘り起こす人間はいない。

AX-58ウイルスは確かに脅威だった。感染から発症まで一時間弱。そこから死までたったの二時間。

六万人のうちの何割かはウイルスで死んだ訳じゃない。

「必ず死が訪れる」「だったら次の感染者を出さないうちに」

何人が人の手で殺されたかは分からない。その中にはあの少年のように生き続ける未来を持った者がいたかもしれない。

しかし実際に生かされる運命を持ったのは彼だけで、それも「ウイルスの捕獲」という名目だった。自然発生のウイルスか。人工的な生物兵器か。

彼も死ぬという前提だった。それが生き残って…。

予定外。絶対的な死の前で公表出来るはずも無い。

確かに彼の体内にウイルスが存在している。

だが抗体らしい物が発見される事も無い。

ウイルスと共存している。

症状の出ない彼から感染する確率は？

これが「潜伏期間」で、ある日突然発祥する可能性は？

生存者の存在が社会に及ぼす影響は？

少年はあれから十年経った今でも施設の外へ出る事は無い。テレビ、インターネット、情報社会で世情を仕入れるのは簡単だが関係ない。どうせ出られない。

人間って残酷だ。

色素の薄い少年の瞳に、施設の管理者の姿が映る。

「せんせえ俺を殺す気はないの」

先生と呼ばれたガラスの向こうの白衣の男は彼をちらと一瞥しただけだった。

要らないなら殺せよ。

目を細めて胸中に吐き捨てたのは、そんな台詞。

「せんせえだったら俺を逃がすつてのはどお」

何千と繰り返した言葉。別に返事を期待しじゃない。

彼は今もそうやって毎日を繰り返している。

## 2・瞬と千代

「せんせえ俺を殺す気はないの」

。「せんせえだつたら俺を逃がすつてのはどお」

決まりきつた独り言。

「…出たいか」

少年の予想を大幅に裏切つて、白衣の男が答えた。

一瞬少年は目を見開いたがすぐに表情を戻して口元に笑みを浮かべる。噛み付く様な笑みを。

「そりゃあね」

「十年か……長い事閉じ込めてるよな。正直閉じ込めてる側の俺も疲れたよ」

腹の底を重い物が這う。このパターンなら無い方がマシだ。

「そろそろ殺すか逃がすか決めねえ？」

「そうだな。殺すのは寝覚めが悪いから逃がすか」

「その気もねえのに言うな胸クソ悪イ」

無い方がマシな不毛な会話。

いやそもそも会話を求める事が間違いだ。

「出たいって言うなら出してやつてもいい」

白衣の男の言葉に少年の笑みは深くなる。

「他に感染しない保証でも見つかったかよ」

まるで自分が全ての傍観者だと言うように。

「いいや」

この世の全てを嘲るように。

「だったら、クスリが出来たか」

「いいや」

ふざけんな。

「それで俺を外へ出すなんて無理な話だろ」  
逃げられない理由を自ら告げる。

俺がそれを言えば満足なんだろ。狂ってるぜあんた。こんな仕事してりゃあ捌け口が欲しいのも分かるけどよ。

「お前が六万人の命の重みを知っていて良かったよ。逃がしてまたあの惨事が繰り返されると思うとぞつとしたが」

六万だろうが何万だろうが他人の命に興味なんかねえ。

少年は笑う。

「あんたは何にも分かっちゃいない」

俺がここに居る理由。まさか本当に出られないとも思ってたのか。

三食飯付き。労働を強いられる事はない。生きるのに不便はない。だからこそ「生きている」気がしない。気を抜けば腐っていく確信があるこの檻。

いい加減逃げるか。

煙草を燻らせながら片隅に落ちたそれが「現実」への唯一の感情。煙草も酒も簡単に与えられる。いくらでも。この場所から出る以外は大抵が叶う。それが少年には『そのまま壊れてしまえ』。

そんな意図を含んでいるように深く刺さる。

六万が何だよ。俺は何なんだよ。

誰かに敵意がある訳じゃない。恨みも憎しみも無い。自分の置かれた状況を不条理だと思っても、その意味や理由まで否定する気はない。

分かってる。俺一人閉じ込めときゃ丸く収まる。分かってるよ。他人の命に興味はない。誰が死んでも構わない。哀しくない。だけど。

俺が、殺すのは。

ここから出るのは簡単なんだ。  
出口なんて見つけなきゃ良かった。

魔が差して出たとして、

何の意味があるのだろうか。

殺人犯になりたい訳じゃない。

自由になりてえよ。

生きている、実感が欲しい。それが無理だっていうなら。  
もう、いいから。

「殺せよ」

冗談でも挑発でもないありのままの言葉。

狂う前に消してくれ。もうそんなに待てないんだ。

六万のリスク。道連れに派手に死ぬのもいいかもな。

そんな事さえ考えてんだよ俺は。危ねえって思う。自分でも。それでもそれが現実になりそうで恐いんだよ。早く。

「殺せ」

俺が理性を繋いでいるうちにこの世から消してくれ。

「言っただろ。殺すのは寝覚めが悪い」

ああ、いい加減にしてくれ。

「そついう事は考えるな」

溜め息混じりの、白衣の男の声がどうしようもなく耳障りだ。

「…殺すのが嫌なら楽に死ねる薬でもくれ。呑んでやるよ、今こ  
で」

そつ吐き捨てる。

全てが面倒くさい。

白衣の男の口元が静かに緩んだ。

そうかよ。

自殺を望んでたのかよ。

あんたも馬鹿だな。もっと早くそうだと分かっていたらこんなに縛られずに済んだものを。

あんたは俺に、俺はこの世に。

「相変わらずの墮落主義だな。瞬」

明らかに弧を描いた唇が、笑みをそのままに俺の名前を呼んだ。カウンターをくらう、というのか余りの驚きで自分の体が固まるのが分かる。「凝視する」ってのはこういう事か。

何で呼んだ？

今確かにシュンと。

俺のいつに無い無防備な反応に満足したのか男は遂に声を出して笑い出した。

何だ？これから死ぬって奴に向かってウゼエ。

残っていたともいえないとも言えないような生に対する未練がきれいさっぱり消えていく。むしろさっさと死にえ。滑稽な話だ。

「瞬」

呼ぶなクソヤロウ。

「死ぬな」

「は？」

男の一言が、知らない国の言葉に聞こえた。

「実は感染者の生き残りがもう一人いるんだ」

続けて紡がれる理解しがたい台詞。

「……なに言ってるんだてめー」



「お前と同じ年だ。会う気はないか」

「生き残りは俺一人だつてずっと言い続けてたじゃねーか」

一体何考えてんだ。それも今更。

「向こうが優等生でお前が問題児だから上の連中がごねてたんだよ。接触させるべきじゃないってな」

「だからなんで今更」

「今更、じゃないんだ。それでも今まで接触出来るように手を回してきてたんだぜ」

俺に向かつてにやりと笑い、男は「俺だつて情くらい湧くんだよ」と放ってくる。

意味がわかんねー。

「つか…。その生き残りの奴が優等生で問題ねーなら俺も接触なんかしない方がいいと思うんだけど。あんたの上司懸命だな」

素直に認めてやる。実際そうだ。揃って脱出なんかしたら大事だ。隔離しといた方が良い。

「あのなー。好意を素直に受け取れよ。同じ境遇の奴と話せるんだぞ？」

この男こんな奴だったのか…。今の今までまともに話した事なかったけど。愕然とする。

「それよりてめーが冷静になれ。すげー危ねえ」

思い出した煙草の存在を主張しながら煙を混ぜて吐き出す。わざわざ言わなくても良い事だが、実際俺の本心でもあるから仕方ない。それを受けてふうつと男は一息ついた。

「冷静すぎるんだよ。お前は。客観視ばっかしてるからいつそ死んじゃまった方が楽とか思うんだよ」

「はあ？」

「第三者の意見なんか聞き飽きたつってんだよ。瞬がどう思ってるのか聞いているんだ」

俺が？俺が？

「……せんせえさあ…。真正面から受けてたら耐えられない事とか、

ないわけ？客観的に見てやつと納得出来る事とか。渦中で身を裂く  
思いするくらいなら総体的な理論に委ねた方がまだマシとか」

男が眉間に皺を寄せる。何で俺はこいつにこんな話してんだ。

「今まで客観視して自分を繋いできた俺としては、自分の感情は殺  
すもんって持論があんだよ。あんま甘く見んな」

「お前がそれだから接触させたいと思ったんだよ」

「…駄目だもう喋んな無駄だ。噛み合ねー」

「そうは言っても千代は『会いたい』って言ったから連れてきてる  
んだ」

千代？

「あ？ふざけんなっ…」

言葉に詰まる。ガラスの向こうに、宇宙服の様な「感染防護服」  
に身を包んだ少年。外界から自身を守るためではなく外界の自分以  
外を守るための防護。

「… そいつが…？」

男が紹介をする前に、その少年は世の中に何の不満もないと言う  
ような穏やかさでふわりと笑った。

「初めまして、瞬」

こいつが、感染者。もう一人の。優等生だって言う…。俺と同一  
年？幼い顔…。

「てゆーか重っ」

俺の観察を完璧に無視して「千代」と呼ばれた少年はずかずかと  
ガラスのこちら側に入ってくる。

誰が入っていいつつたよ。

ずかずかと入ってどこかと防護服を脱ぎ捨てる。音からして相  
当重量がある事が分かる。

「大げさなんだよね。空気感染はしないって言ってるのにマジで重  
いこれ」

やれやれと自由になった体を軽そうに動かして俺を見る。防護服

の下はTシャツにジーパン。それからいやに明るい茶髪。

正直拍子抜けだ。

「俺、千代。なんか作者の因縁感じるよね。千代って『永遠』って意味なんだって。で君が瞬でしょ。」

『一瞬』の瞬。浅はか極まりないよね。」

はははと笑って自己完結的に喋る。生憎答えてやる義理はない。そもそも言ってる意味がわかんねー。

本当にこいつ俺と同じ境遇で生きてきたのか？

「問題児だっけ聞いてただけだ」「俺の想像と違う、瞬」

ああその言葉そっくり返してえ。

「俺今まで話し相手いなくてつまんなかったんだよねー。周りオッサンばっかだしさ。だから会いに来たんだ」

そう言っただけで笑う。

…なんか。うざいんだけど。

「そんなあからさまに迷惑そうな顔されるとさあ、……」

そっか顔に出てたか丁度いい。早く出てけ。

「いっそ面白いよね」

ははは。

ちよつと待て仮にお前が面白いと感じるとしても俺は違う。まず同意を求めんな。

「ねー瞬」

「うっせえ馴れ馴れしく呼ぶんじゃない。…俺は会いたくないっつたんだよ」

不毛だろ。

「ええ？孤独を愛する派？洪…」

「ちげーよ！」

「じゃ何。感染者同士積もる話だっけあると思ったのに」

なんでこんな軽いんだ。くそ、苛々する。

「話なんかねえ」

「あるって。少なくとも俺には」

「近寄んな俺は馴れ合いなんか求めてねー」

初めて沈黙が訪れる。

傷付けたか。けどそれが必要だ。悪イな。

「そのままそうやって孤独を守って死んでくつもりなの」

驚いた事に真面目な声音で聞かれた。なんだこんな声も出せるのか。真剣に馬鹿かと思ってた。

「要らねー罪は背負いたくねえ。一人なら諦めるのも簡単だ」

一人なら未練なんか持たずにいられる。面倒くさい事はしたくねえ。

「ふうん」

呆気無い返事だった。分かったのか分かってないのか。

「でもさあ」

分かってないな……。うんざりする。でも、って何だ。

「俺暫くここで生活する予定なんだけど」

…………

「はあ!？」

「だって感染者の輸送なんてそう簡単に出来るもんじゃないしさ。ここに来るのだって手続きとかなんかで半年はかかったんだよ」

「っここって……ここか？」

「そうそう」

冗談じゃない。

「何とかなんねーのかよ？」

「無理。瞬が拒否るとか誰も思ってたねーもん」

何だそれ…。

追い出す訳にもいかねー。俺が留まってもこいつが外に出たんじや意味がない。大げさだと言いなながら防護服を纏うくらいだからウイルスを巻き散らかす気は全然ないらしいが。

一つ舌打ちをする。その舌打ちが“了承”を物語る。  
こうして頼んでもない共同生活が始まった。

### 3・BLACK MOON

喧嘩を売っているのかそれとも行き過ぎた冗談か。

「どつちなんだ…」

突然の訪問者、千代の滞在を認めてから一夜が明け…、クソ、朝っぱらから頭が痛い。

「何？」

見下ろした床にはくつろいで胡座をかく、問題の少年。とても昨日来たばかりとは思えない適応の早さであつさり熟睡、予想に反せず健康的に早い起床。俺の浅い睡眠を顧みず恐らく日課らしいストレッチ。こつちもそれ以上寝る気分にもなれず起きたは良いが、とにかく煩い。トークが、ではなく存在が。

むしろこいつの方が前からここに居たんじゃないかと錯覚さえ覚える。それはいつそ「千代がここに馴染んでいる」のではなく「この空間が千代に馴染まされている」といった方がまだ分かりやすい程だ。最たる原因はこの朝から途切れる事なく運び込まれてくる本。ああ、あの段ボールの中身も本だ。どんだけあんだよ。遠慮つてもんはないのか。今もくつろいだ様子のその手には分厚い本が一冊。丁度真ん中のページ辺りで開かれている。

「瞬、何が？」

きょとんと見上げられた目には微塵の悪意もない。自覚なしか。サイコーだ。

「何が、じゃなくてこの荷物は一体なんだ」

「本だけど」

すげーよお前。大物だ。

「んなの見りゃわかんだよ。何で持ってきてんだ」

「んー…。なんとなく」

「なんとなくでこの量か？」

ここでやっと「ああ」という顔をする。今更なんだよ勘弁してく

れ。

「邪魔？」

「言うまでもないだろ」

「ここ広いし殺風景だから別に良いかと思ったんだよね。瞬持ち物無さ過ぎ」

「話逸らすな」

「ごめん」

「ごめんとか。言う奴いるんだな。」

「床に置くな。棚も一緒に持ってこいバカが」

千代の目が丸くなる。あれ？と言いたげな。でも次の瞬間に笑っていた。あの最初に見せた世間で言う「無邪気」だとか「悩みなんてありません」みたいな軽やかな笑顔。

「瞬で良かったな」

…しかし生憎俺はそうは思わない。

「恐ろしい事言うな」

その後暫く千代は「良かった」を連呼していた。それを見ながら「下らない」と思った。

ただ「下らない」と口に出せずにいる自分が可笑しかった。

千代はマイペースな奴だ。よく喋るがそれは別に相手に気を使っている訳ではないらしい。自分が思ったまま喋る。沈黙が恐いとか、そついうありがちな感覚はない様だ。唯一の救いだと思う。

俺には静寂を埋める話題づくりなんて術がない。

「趣味とかないの？」

大人しく本に齧じり付いてんな…とか思っていたら千代の口から突然そんな言葉が漏れた。俺がぼんやり煙草吸ってんのが気になっ

たのだろう。これで何もしてないように見えて頭ん中はそれなりに動かしているのだが、もちろんそう言う気ははなはだない。

「ああ？」

ぶっきらぼうに返す。

「一人で今までどうやって時間潰してきたのかなあって」

「…さあな」

どこか自嘲的な言い方だと言ってから気付く。趣味か。その言葉の意味がまずわからない。いつ死んでも良いようにって考えてたんだぜ。今も。そんな奴に趣味が必要か。

「煙草美味しい？」

脈絡ねーな。俺の返答がこれだから仕方ないんだろうけど。

「美味くはねーよ」

「へえ」

それで会話はぴたりと終わる。

千代が来てから最初の一週間はそんな調子で過ぎた。

生産性のない会話。

ギリギリ遠く取る見えない距離。

踏み込む気はないし、踏み込ませる気もない。

近寄るな。近寄らせるな。それで守られるんだから。

一週間が過ぎ、二週間が過ぎ。

頼むからその場所に立つのは止めて欲しい。

嵌め込みの巨大な窓ガラス。

俺たちは決して行けないのだから。  
その隔たりの向こうへ。

「千代」

初めて名前を呼んだのは、出会ってから一月が経った頃だった。  
月の白く冴えた逆光を受けてガラスの前に立つ背中を呼んだ。ひ  
やりとした春の夜。ひやりと、とは言っても実際には施設の中は常  
に適温が保たれているらしいから、それは俺の気のせいだ。俺はこ  
の世界の温度なんか覚えてない。

少しだけ驚いた顔をして千代は静かに俺を振り返った。俺を視界  
に入れて微笑む。

「眼中にないかと思ってた。俺の事」

そう言った。相変わらず微笑していた。俺は答えない。

「月がさ、キレイだと思って」  
闇に溶けるような口調だった。そのまま溶けていきそんな気がし  
た。

霞んで無くなってしまいそんな細い月。深い墨を零した闇。それ  
でいい。

太陽も青空も望まない。

ゾクツと狂気が動くのが分かる。

誰か何か言ってくれ。さもなきゃ今すぐ殺してくれ。

千代は言葉を紡がない。ガラスの向こうに戻した瞳を、届かぬ空  
に預けるだけ。その無言の内にある感情を俺は知っている。あの下  
にある風も匂いも、俺たちは感じる事がない。焦がれて焦がれて、



行きたくてそれでも、叶わない。

出口の存在が過る。

千代が来た時からこれが恐かった。

俺一人なら平気だったのに。

それなのに。

同じだなんて思ったら駄目だ。

どれだけそれに懂れてるなんて。

どれだけそこに行きたいかなんて。

知ってしまったては駄目だ。

生きるって、もっと。なんて。

「そこに立つな」

抑えた声で、出来るだけ何でもなく聞こえるように言った。千代、そこに立つな。そこでそうやって、眩しそうに外を見るな。

「なんで」

なんで、じゃなくて。

「…いいから」

そう俺が濁したのが気に入らなかったらしい。

「なんで」

強い調子で再び聞かれる。

「なんでだっていいだろ」

「良くない。言わなきゃ分かんない」

「言う必要なんかねえ」

「なんで…」

最後の「なんで」は語尾が掠れるように消えた。伏せた瞳が悔しそうに揺らいたのが分かった。

「いいからどけよ」

「瞬は」

千代が口を開く。聞かない方が良くとっさに思う。

「千代、黙れ」

「瞬はこのまま一生」

「黙れ」

「ここで…」

我に返ったのは殴った後だった。

「悪イ…」

俺がそう言っていると、千代は左の頬から唇にかけて手の甲でぐいっと拭った。

「別に。もう、いいよ。分かった」

諦めたように呟いた。普段の軽い口調でも、かといって真剣な口調でもなく、中身を窺い知る事の出来ない冷めた言い方だった。

「俺はさ、喧嘩したくて来たんじゃないし」

言葉が見つからない。

「ここに立つの、なんで嫌がんなのか知らないけどもう聞かないし」  
そうやって、お前は妥協するからあんなふうに笑えるのか。

「でも俺別に瞬に嫌がらせした訳じゃなくなってただ」

月が見たくて。

分かってんだよ。そんな事は。

「分かってる。悪かった」

言った瞬間に月の光しか存在しない部屋が一層しんと静まった気がした。

千代の驚いた気配がじわりと伝わってくる。

「分かってんだよ。俺だって知ってる」

「知ってるって…」

「外に焦がれる気持ちも。生きてる証拠が欲しいのも」

半端に口を開きかけて、千代は何も言わずにこちらを見ている。  
「そこに立たれると余計現実突き付けられてる気がすんだよ俺は。」

行けないから…、悲壮感増すだろ」

だから嫌だ。

「なんで…。言わなくても、もう俺聞かないって」

「いや。なんかそれはそれで」

口ごもる。自分の中で矛盾した感情が渦巻く。

「それはそれで？」

「……お前まで諦めてんのが。つーか、…諦めるとこ見んのってあんま気持ち良いもんじゃねーなあ…」

俺は今までこうやって諦めてたのか？世の中を、生きるのを？

すうっと肩の力が抜けていく。

「瞬？」

「オモシロオカシク生きんのも良いかもな。今まで我慢してたし」

「瞬、大丈夫？」

「問題ねー。千代暴れるぞ。付き合えよ」

自然と口角が上がった。それは多分、千代のふわりとした笑みからは遠く、もつと殺伐とした…。

試してやる。自分と、世界を。

#### 4・シナリオ

「瞬。それ体に悪くない？」

横顔にくわえ煙草。

「一応未成年だったのに」

呑気な感想に苦笑が漏れた。

「そんな事より千代、これ見てみるよ」

煙草を揉み消しながら、抱えていたノートパソコンを千代の方に向けてやる。

「驚きだぜ。ここ、東京だったさ」

パソコンに目を落としたまま無言の千代。言葉を発する気配もない。煙草に意見する気はあるのにこっちはコメント無しか。まあ妥当な反応だけど。

「……」

千代は口を開きかけては黙る。その繰り返し。それが結構面白くて、俺は何も言わずに待っていた。

「なんで」

やっと出てきた台詞が。なんで。

「なんだよ。気の聞かないコメントだな。もっとマシなの期待した」辛辣な言葉にも千代が驚いたままの表情で固まっているのはパソコンに映る内容か、それとも俺が（恐らくタチの悪いという表現が適切な）笑みを停めているせいだ。

「だって、瞬、施設の外に興味なさそうだったし、実際俺ら出れる訳じゃないし。ここが何処とか。それこそどうでもいいっていうか、知ったからどうって事も……」

「どうってことあるんだよ」

自分はやっぱり性格が悪い、と思う。千代のネガティブな発言が面白い。

「千代。俺は」

ばしつと視線が合う。ああ、きつちり聞いとけ。

「諦めるのを止めたんだよ」

そうだ。いつ死んでも同じとか。仕方ない、なんて言葉で濁すのは。

「止めた」

「瞬……外に…、出るつもり…？」

恐る恐るといった質問。「もしかしたら」とふとよぎる。外に被害が出る事を恐れているのは俺より千代の方なのかもしれない。でもそれも知らねえ。俺はニヤリと笑う。

「ああ」

「そっ……か」

空気が張るような数秒。止める言葉を探してるのか。無駄だぜ。

「瞬、だったら…」

「おう」

「俺も付き合うよ」

予想外。

「止めないのか？優等生」

「うん。必要ないからね」

ふわり。その笑みは全てを受け入れるようで、全てを拒絶するようで。ただキラキラとした瞳だけが千代に偽りが無い事を物語る。

「瞬。俺は面白いのがスキ」

調子狂うよお前。

「優等生より、共犯者の方が魅力的だ」

素行良好そうな顔して。

「後に引けないぜ？」

「そこが面白いんだよ」

なんだそれ。

「そもそも空気感染しないし、多分他の感染の仕方もない」  
？

「…それって、」

「だから、実際の話俺たちが外に出たところで何も起こらないと思うよ」

「は…」

それは。

「あーだから…。俺たちが隔離される理由って、つまり、…、無いんだよね」

「はあ!？」

、…待て、

「感染するかもしれないから閉じ込められてるんじゃないのかよ」  
だから十年も大人しくしてたんだぜ俺は。

「…。千代、お前なんか知ってるのか…？」

「まあ…十年もあつたんだよ、研究の成果が全く出ないなんて変だろ」

どんなウイルスなのか。感染ルートはなんなのか。

「俺だつて調べた。他にやることもなかったし、考えるのはそれなりに面白かつたし」

聞きたいのはそんなことじゃない。

「俺、研究室に出入りしてたんだ」

ウイルスの提供者として。それから、

「もちろん防護服来てだつただけ」

研究員として。

「ある日突然一緒にやってた研究員の二人が感染して死んだって聞かされた」

「感染……？どういうことだよ、矛盾してるだろ」

千代が顔を伏せる。軽そうな茶色の髪が重力に従って落ちた。弧を描いた唇は恐らくいつもの笑みとは違う。髪に隠れた目が見ればその意味が分かりそうだったが、無理にそれを暴く気にはなれない。

「瞬つていい奴だよね」

場違いな台詞。遠回し過ぎる。

「……はつきり言えよ」

「俺、信じれなくて。死んだって」

「研究を打ち切る言い訳にしか聞こえなかったんだ」

「……頼むから分かりやすく言ってくれ。全然呑み込めねえ」

「迷宮入りさせる、口実だよ」

口実……？

「もう調べないってことか？」

「じゃなくて、

結果が、」

「……なんだよ」

「都合の悪い結果が出たんだ。きっと大多数にとって」

「……」

「例えばウイルスの発祥地が国に必要不可欠なところだとか、今まではテロだとか自然発生だとか誤魔化されてたけど、とにかく研究結果が表沙汰になったら不利益が多いことなんだろうと思う」

……揉み消されたんだよ。俺たちの、存在ごと。咳かれた言葉に逃げ場所がない。

「研究員の二人が死んだって以外俺は何も聞いてない。俺は研究員全員を知ってたのに、犠牲者が誰か教えないなんておかしいだろ。どうして感染したかも、ほんとならそこからルートだって割り出しやすいっただろうに『だから研究は打ち切る』なんて、不自然すぎるよ」

「それは、お前の推測だろ…？それとも確信してるのか？」

確信してる。そう言って上がった千代の目は、揺らぐ素振りもなく涼しげだった。

「研究員は全員生きてる」

「…で、研究は事実上打ち切り、俺らはここで朽ち果てるってのが用意されたシナリオか？」

「そういうこと」

何だっけ言うんだ…。

「それは証明できるのか」

何も言わない千代の目に先を促される。

「他に感染しないこと、研究員が生きてること」

お前の言っていることが真実だってこと。だとしたらお前は、一緒にやってきた研究員や、結果や、その先の未来にどれだけ裏切られたって言うんだ。

「俺の口先が信じれないなら外に出る以外証明するのはムリ」

冷えていく。そう思った。

俺と千代の間を埋める空間が、遠い。

「俺が外に出るって言わなかったらお前、…」

このままずっとここにいてもいいつもりだったのか？

「あー結構どつちでも良かったし俺。無理矢理出るほど外に魅力も感じてないしさ」

多分本心なんだろう。

「千代。俺はお前と一緒に外に出る」

真剣に言ったら千代が吹き出した。

「何の宣言だよ、そんなキャラじゃないクセに、」

あははマジウケる。

…本気で笑ってやがる……



「やっぱてめーうぜえ…」

「ごめんごめん、ついていきます隊長!!」  
「はは。」

ダメだわかんねーこいつ。むかつく…

「ねーねー瞬」

「だよ、」

溜め息、苛立。有り得ねえ。

「サンキュー」

…。

なんか。

…まあ、いいか。

なぜか苛立つてるのが馬鹿馬鹿しくなった。

「なあシナリオ書き換えって、アリだよな」

独り言と問いかけの間の中途半端な呟きを空気に乗せる。千代の描いたシナリオか、ただ押し付けられただけのシナリオか。どのもち従えない。

コメントを寄越す代わりに千代は口角を柔らかく上げた。ああ、そっちの方が似合ってる。

「派手にやろうぜ。感染しないなら躊躇わずに済む」

「うん。でも当たって碎けたくはないね」  
そう言っ喉の奥で笑う。

「言ってることの割に楽しそうだな」

「え、あー、わかる?…うん、楽しいんだ俺」

いや言われなくてもわかるけど。見れば。  
「得なキャラだなお前」

「ん？うーん、ありがと」

今礼言う意味と言われる意味あったか？

「褒めて、ない」はず。

にこやかに頷いた千代は、それでも相変わらず俺に出来ない笑い方で、

「気にすんなって」

へらつと言った。こういうのは、わかり合える日が来ない気がする。

からからと流していくことは俺には出来ない。真似するつもりも無い。

けどこいつと一緒に行くのはそんなに悪くないと思う。手に手を取ってなんて、それこそ柄じゃねーけど。

「あー俺本気で瞬で良かったと思うよ、逃げるだけなのにワクワクする！」

…脳天気。とにかく取り敢えず、…真似はしたくない。

「無駄にポジティブとか今要らねーから」

「うわ冷たー」

「、、、、」

「…。すいません隊長」

隊長じゃねえ！！

「当たって砕けないためにはどうすれば、」千代真面目に聞け」

「…、わかった…」

これじゃあ先が思いやられる。

頭痛の予感を紛らわすように放置していたパソコンを引き寄せた。

## 5・おかえり

「取り敢えず、施設の設計図と警備の人数、配置だな。まあ設計図はホストコンピュータに侵入すれば見つかるだろ」

キーを叩きながらばやくと、右隣からパソコンを覗き込んでいた千代が目線を俺に移した。

「侵入、って」

ああ、これ犯罪だっけ。

「ハッキングってこと。任せるバレねーから」

そもそもオンラインで繋がるパソコンを易々と俺に渡した奴らが悪い。

「そんなこと出来るんだ瞬…」

感嘆と、半分呆れの混じったそれでもいくらか控えめな感想が耳に届く。

「お前はさあ、前の施設じゃ周りと良心的な付き合いしてたみたいだけど」

視界はスクリーンのまま、声だけを千代に向ける。

「俺はそういうやり方に興味ねーし」

正当な方法は正当な権利を認められた人間が行使すればいい。

「っーか言い忘れてたけど、俺この部屋の鍵開けれるから」

千代がつきかけた呼吸ごと停止した。

「…え、」

「だから鍵開けれる。…オイそろそろ息継ぎしろよ」

大丈夫かよ。

「嘘だろ」

「嘘ついてどうすんだよ」

「だって…、この部屋の鍵は外からしか開かないって」

千代が動揺するほど俺の思考はクリアになる。

「設計者のコンセプトは一応そうだろーよ」

今までどうやって時間を潰してきたのかと。これが答えだ。

「けど俺にとつてはちゃんパズルだ」

暇つぶしになりそうな事ならほとんどやった。おかげで犯罪以外では役に立ちそうもないスキルばかり身についた。

「脱出するためにお前に足りないものは、全部俺が持つてる。技術的には問題ねえ」

そして多分俺に足りないものを、こいつが。

「なんか…、割に合わなくない？瞬に犯罪みたいなことやらせんの、ちよつと気分悪いんだけど」

「犯罪みたいじゃねえ、犯罪だ」

「きつぱり言うな」

小さく拗ねるような声が聞こえて、その後溜め息が続いた。

「瞬はさ、俺が思ってるよりずっとずっと面白い奴だよね」

「…。はあ？」

何言い出すんだ突然。千代の脳みそは俺とは根本的に質が違うらしい。薄々そんな気はしていたが、それがついに確信に変わる。俺にしてみれば前の会話が丸ごとすっ飛ばされたような気分だ。

「…今のどこをどう解釈したらそんな結論になるんだ…」

「ん、素直な解釈だと思う」

そう言つて、機嫌が良いのか（それとも特に何も考えていないのか）千代は毎度ながら微笑していた。

「どこがだ」

逆に俺はもやもやしたものが残つて、眉間に皺を寄せる。

「瞬あんま難し 顔すんなつて。硬い硬い」

はいりラックスー、とか何とか言つて背中を叩かれる。そのせいで俺は余計に苛ついたのだが、もちろん千代がそれを悟る気配はない。

「テメーはもう少し難しい顔してろ笑つてんじゃねえ緩すぎだ」

後ろ手に振払いながら文句を投げる。緩すぎの千代の顔は曇りもせず楽しそうで、こっちは苛ついただけ損をしたのだと気付くが、

だからと言ってどうしようもない。

「うんじゃあ俺が警備の人数と配置調べればいいよね」

ここには二人しかないのに、話の道筋が見えているのは千代だけだ。俺はうんざりするが咎めるほどでもなくて、それはそれとして諦める。

「随分あっさり言うな。調べれんのかよ」

「うーん多分ね」

、  
…へえ。

へらへら笑ってた瞳にどこか別の意志が混じっただけで千代の表情は180度変わった。

「だったら任せる」

「はは、期待しててよ」

「おう、設計図は手に入ったからよ」

エンターキーを強めに弾く音が思いの他響いて、千代が誘われるように身を屈めてきた。スクリーンに施設の詳細な設計図が映し出される。

「速…うわ。スゴ」

ボキャブラリーを駆使した言葉じゃないから心地が良くて、知らず気が緩んだ。

「あつ、そうそうそれぞれ！」

「つつるせえ！！なんだよ！」

いきなり至近距離ではしゃがれて、咄嗟に怒鳴りつけた自分の声が予期した以上にでかくて二重に驚いた。こんなふうにしたままを他意無く発するのには、ずっと抵抗があつたのに。

「そーゆー顔してればいいんだよ」

ひどく晴れやかに言われて呆気にとられる。

「…なにが…」

「うんやつぱり人間、眉間に皺寄せてるより多少無防備な顔してる方がいいねって話」

「へえ…、」

「なんだよノリ悪いなあ」

「んなことで一々はしゃぐな面度クセエ……」

それは本当に俺に取ってどうでもいいことで、そこに価値を見出しているらしい千代には悪いが実際本気でよく分からない。ノリのいい俺つてのもなんか気持ちワリーし。

「まあイイや」

「まあイイのかよ。」

「じゃちよつと行ってくるね」

「は？」

「警備員のシフト表とか色々、パクってくる」

「は！？」

「早い方がいいでしょ」

立ち上がりかけた千代の腕を掴んで引き止める。

「ちよ、待てつて、」

「うん？他にもなんかいる？」

「何しにどこに行くんだよ」

「ぼかんと俺を見下ろす千代は少し素っ気ない。」

「必要な情報を集めに、警備員室に行くつもりだけど。…なんで止めるの」

「危ねえ、だろ。…」

脱出の算段を整えてるなんてバレたらどうなると思ってたんだよ。ちよつとは慎重になれねーのか。

頭上の空気が揺れた。千代がふつと笑う。

「俺を信用しなよ、瞬」

試すように囁かれる。今手を離さなかったら、きっと千代のプライドを潰すだろう。

「分かった…。気をつけろよ」

「うんありがとう」

柔らかに紡がれた柔らかな言葉が千代にはとても似合っていて、そんなこと言うのも言われるのも慣れてない俺はなんだか焦れった

くて、否定したいような気がした。別にありがとなんて言わなくても成り立つ会話でも、こいつはそれを言うのを躊躇ったりしない。「鍵、開けるか？」

手を貸そうと最小限を持ちかける。

「うっん。いいよ、それは切り札にしとこうよ。普通に散歩したいとか言って防護服来てくから大丈夫」

あのすげー重そうなやつか。無意味と知りながら身に着けるのだから苦労だとしか言い様が無い。

「お土産欲しい？」

「たかが何メートル離れるだけで土産かよ」

防護服を着たところで、動けるのは施設内だけだ。そこから公式に外に出ようとするならほとんど狂気に近い書類の山と検査をパスする必要がある。しかもそれだけやって外に居れるのは人のいない山奥に小一時間というのだからやってられない。

立ち上がって不自然に足を止めた千代が振り返る。

「瞬、ここから出たら何したい？」

「……」

別に、そんなの。

「自由って、何だろうって、分からなくなるよ」  
「知るかよ。」

「無事に出てから考えろ。今の優先事項はそれじゃねえ」  
「そうだね」

微笑んだ千代は納得したようにも見えたし、何も感じていないようにも見えた。

「分かんねー奴だなお前も」

ぶっきらぼうに言っても千代が反論することはない。

「やりたいことはともかく……。行きたい場所ならあるぜ」

千代の瞳がぱつと開いて、どうやら興味を惹いたらしいことが分かる。何に悩んでんだか全然理解は出来ないが、その時その時の表現は開けっぴろげにストレートで分かりやすい。不思議なもんだ。

「どこ？」

「海」

青い海。それだけ。

人込みに混じってみたいとか、そういうことは思わない。

そう言ったら千代が笑った。ああだよね、と、気負いのない返事だった。

千代が装飾の一切無い簡素なブザーを押す。施設の人間を呼びつける機械的な電子音だ。

カチャ、と受話器を取ったんだかマイクの電源を入れたんだかのつまらない音が聞こえて、男の声が被さる。

『どうした？』

愛想も何もない煩わしげな第一声だ。これでこいつは「情くらいわくんだよ」とか言ってたんだから全くどうかしている。ついでに白衣の上でにやっと笑った男の顔まで思い出して、元々高くもないテンションが更に落ちた。

「気分転換したいので鍵を開けて貰えませんか」

内線の男の声に応える千代の台詞に内心ビビった。丁寧な物言いは、しかし男に引けを取らないくらいに愛想がない。

『ああ、防護服着るよ』

千代の愛想の無さには頓着なしに内線はあっさり切れた。

この部屋は物々しげに三重扉になっていて、こちらから見て二つ目までは硬貨ガラスだから無駄に長い廊下が見える。

ここが東京のどこだか知らねーけど、住宅事情が大変だったのに一体どんな権限だよ。

下手をしなくても十分人が住めるだけの余裕がある。

「行ってきます」

俺には愛想の安売りをする千代は、当たり前前に笑ってひらりと手を振る。



「おう」

一人の例外も無く誰にでも分け隔てなく愛想の無い俺は、やつぱり笑顔で送り出してやるなんてサービスもしない。ただ了解したという意味表示をするだけ。

どこで操作してるのか、ガチャンと一枚目の扉の鍵が外れた音が出て、千代がそれに手をかける。

「あーあ、あの服マジ思いんだよなー…」

そうしてばやきながら扉は閉じられた。

千代が出て行ってから久々に一人きりの自由を堪能した。いや、実のところ包み隠さずいえば「堪能」では語弊がある。煙草を吹かす程度のその小一時間は、自分でも驚くくらい虚しく感じた。

今までこれが普通だったのに。

隣に居れば居たで実際鬱陶しいが、居ないことに違和感を感じる程度には俺は千代に愛着があるらしい。そう気付いてうつすらと背筋が冷えた。何寂しがってたんだ、キショイ俺…。考えなくて良いことと程考えてしまうもので、感傷を振払えずに呑気な時間が過ぎる。

そうして60分が過ぎる頃、遠くで声が聞こえた気がした。視線をドアに向かって上げる。

「…何やってんだ、千代」

千代が帰ってきて、それはいいのだが三重扉のこちらから二枚隔てた向こうで俺に向かって何か叫んでいる。聞こえねーよ。お前に目の前の扉は見えないのか千代。遮られてんだよ。

暫くして千代が部屋に入ってきて、それを俺は半分呆れながら迎え入れる。

「何叫んでたんだ今。そんな一刻を争うことだったのかよ聞こえねーよ」

「うん？」

最後の扉の前で乱雑に防護服を脱ぎ捨てた千代は、体が軽くなった開放感から大きく腕を回して俺を見た。

「ただいまって、言ってたんだよ」

「あそこから言う必要ねーだろ…」

前言撤回だ。寂しいとか何かの気の迷いだやっぱり意味がわかんねーこいつ。一人の方が楽だ。

「一生懸命さが伝われば『おかえり』って言ってくれるかなって思っ  
て。瞬フツーにただいまって言ったくらいじゃ返してくれなさそ  
うだから」

だからそこがわかんねーんだよ。一生懸命さってなんだよ…。

「そもそも俺に言われて嬉しいのかお前は」

そうだ問題はそこだ。あー苛つく。

「うん嬉しいかも」

さらっと流すな、っーかどっちだよ。かもって。

「ちよつと凹んだしさ、さつき、」

そこで言葉を切った千代はそのまま黙り込んでしまった。伏せた  
睫毛もそのままで、どうやら外で何かがあったらしい。

「なんだよ」

聞き返した俺をふつと見て、逡巡しながら千代が口を開く。

「施設の人達が、俺見た瞬間あからさまに逃げ出したんだよね」

「感染しないって知らないんだろ、ここの奴らは」

「防護服着てんのに理不尽じゃん」

「ここの奴らは感染者が外に出ることに耐性がねーんだよ。俺は出  
なかったし。防護服着てりゃいいって話じゃねーんだよ」

「そうかもしれないけど、でも、ちよつと傷付く…」

ああ、だから。

「あのさあ、千代…」

「うん？」

「あー、いや、……」

「瞬？」

こんな溜めて言うことでもないんだけどな…。

「なに？」

「…おかえり」

タイミングの悪い挨拶は気まずい。けどその意味が、少し分かったんだよ。

千代が極上の笑顔で笑って、俺に手を伸ばしたから思わず身を引いた。

「っ、なんで逃げんの」

不満そうな声が上がる。

「抱きつかれるかと思って」

「抱きつこうとしたんだけど」

「…俺お前のこと理解するために努力するから、お前もちょっとは俺のキャラを理解してくんねえ？」

「……キャラ変えれば？」

あくまでお前は地でいくつもりなんだな。ああ、頭痛がしてきた。

「瞬、ありがとね」

それが似合う、お前には。千代のせいで起きる頭痛は、千代の一言で収まるようだ。

「別に。ただの挨拶だろ」

ただいまと。そう発した人間を受け入れる言葉。帰ってきて良い場所だと、存在を肯定する。

満足そうに息をついた千代は、軽い素振りで俺に紙切れを手渡した。

「はい、ご希望の品」

警備員のシフトと、立ち位置。その紙には事細かに詳細が書かれていて、書いた人間の几帳面さが伺えた。

「仇になるな。この生真面目な性格は」

呟いて細かい文字を追う。

規定の場所に規定の資料を置くような人間だろう。そういうマメな人種は行動を読みやすい。ましてそいつの管理下に置かれた部下たちなら尚更。

「規格外の事態に対処出来ねーよ、こいつは」

「好都合じゃない？」

「まあ……、俺たちにとってはな」

歯切れの悪い俺の言葉に千代が不思議そうな顔を作る。それを察して言いたくもないが黙ってるのも変だからと俺は言葉を繋ぐ。

「あんまり、誰かのせいにはしたくねーんだよ」

「俺たちが逃げること？」

「ああ、無理だけど」

きょとした目が俺を見つめて、意外そうに瞬いた。

「瞬ってそーゆーのを『偽善』とか言って馬鹿にするタイプかと思つてた」

「基本はそーいうタイプだよ」

「じゃあこれは例外？」

「例外？」

単語をなぞつてつい口元が緩んだ。

「例外、じゃねえ。偽善でもねえ」

ただのエゴだ、こんなのは。誰も傷つけずに我を通そうとしている。犠牲を払わずに欲しいものだけ手に入れようとしている。

「ふうん」

さして興味無さそうに千代が相づちを打った。

「じゃあ責任が大量の人間に分散されればいいんじゃない？一人じやなくて。したら一点集中で責められる人いないし。トップだって自分だけ責めなくていいし」

それで全く問題がない訳じゃない。何かが解決する訳でもない。でも。

他人の人生を丸ごと潰すのは避けられるかもしれない。俺が十年死んでみたいに、誰かの心を殺す、そんな吐き気がする事は。

「それなら丁度いい日があるんだ。俺たちはきつくなるけど」

ほら、と千代が指差した日の警備のシフトは他と明らかに扱いが違っていた。

これ以上ないくらい、鉄壁のガードと言って差し支えない警備体制。きつちり一週間後の警備の配置と人数は尋常ではなかった。

「ね。丁度いいでしょ」

平然と言つてのける千代には、その意味がわかっているのか。

「警備員フルに入つてんな。何かあるんだこの日」

一日だけピンポイントで守りの堅い予定表は、どう控えめに見ても違和感を拭えない。

「警備の訓練？」

まさか。

「んなのしねーよ、この十年一回もなかったんだし今更。大体常勤に上乘せしてまで訓練するメリットがねえ」

「日にち分けてやるの面倒いからみんな一遍に訓練しましょう、とか」

「どんだけお気楽なんだよ」

溜め息を吐き出す一方で、千代ののほほんとした思考を少し羨ましいと思った。

「なあ千代。あの防護服は、俺たち以外を、守つてんだぜ」

「うん」

「いつだって主体になるのは平和ボケしてる奴らだ。俺たちじゃねえ」

つまりそう言うことだ。

「この日恐らく部外者が来る。そいつを守る防護策だ」

俺の思考はこっちだ。夢なんか見ない。

「部外者つて、…」

千代の言葉の先が消える。言い淀んだのではなく、言う台詞が見つかからないせいで。

「間違いなく『俺たちを見に』来る。施設の設備をじゃねえ。俺た

ちを、だ」

この警備体制がそれを何よりも物語る。

「見て…どうすんだろ」

「ここに来るってことはそれなりの権限があんだろ。『この二人が感染者ですが煮るなり焼くなりお好きにどうぞ』ってところかな」

「それ笑えない」

「笑わせたくて言ってるじゃねーよ」

突っ撥ねると、千代は顔を伏せて頷きながらひらりと手を振った。

「わかってるって」

そう言って笑った。それが知らず先の展開の予測に沈みそうになる俺のストッパーになる。

「わかってるよ。それでもやる？この日に」

疑問形式のこれは、質問じゃない。そのクエスチョンは。

「オマエ誰に向かって言ってるんだよ」

俺が言い切るのとはほぼ同時に千代がくつと笑った。まるで肯定を全身で表現しているようだ。

「俺瞬のそーゆーとこ好き」

そうかよ。

「お前変わってんな」

白けた口調で言ってるが、結局へらつと流される。馬鹿だと感情を込めて一瞥をして、しかし余計に言葉を重ねるのは止めた。千代のスタンスにもそろそろ慣れた。他人とどう距離を取るのかって処世術を誰もがみんな、その他人との摩擦で会得していて、多分こいつは折り合い上手く生きることには積極的で、つまるところ俺はそのへんの諸々の事情を放棄していたんだろっ。

「エキセントリック。それも一つの側面」

千代が呟いて、遠くを見据えて口角を上げた。それは俺を含めた他者に向ける笑顔ではなくて、内心の感情が自然と表に現れたものだった。

何を挑発してんだよ、お前。

平和主義者の優等生みたいな顔を持っているくせに、なんか物足りないのかよ。欲張りな奴。

俺の思考を余所に千代は独り言のように話を進める。

「俺たちを見に来るってなると、本当に逃げるの大仕事だね」

ああそつだ。お前にも同じ質問が必要か？

「大仕事がしたくないならお前だけ今すぐ脱出するってのもアリだぜ。扉は開けれるし、逃げやすいルートも知ってる。付き合えとは言っただけど無理して俺に合わせる必要はねえ」

最終決断を促す誘惑。これは形だけで、実際には既に俺も千代も答を知っている。知っているから、これは要するに後戻りしないための誓いを口にし合っているにすぎない。

今まで生きることそのものを規制されていた俺たちは、いつも枯渴していた。

施設の人間への、『感染者を逃がす』責任問題への気遣いとは別のところでそれは燻って、俺や千代を急き立てる。『生きている』ことを、自分に証明しろと。リスクやスリルを欲している。だからこそそれ以外の選択肢を潰して、後悔の理由を残さずに、結果がどうなるうとそれを望んだのは自分だと言いきる強さが欲しい。

「馬鹿じゃん」

俺と一緒に逃げるとさらっと言うだろうと安易に予想していた千代が放ったのは、意外な一言だった。

「……」

不意打ちのせいで、反論しようにも適当な返しが出来来ない。

きょとんとしていたら、なぜか千代の方が発した言葉と裏腹に傷付いて見えた。そのせいで反論でなくても俺は声をかける勢いを失って、結果的に本気で馬鹿みたいにオロオロするはめになった。これが傷付き傷付け合いのコミュニケーションと呼ばれるそれをサボってきたツケだと言うなら、それも確かにそうなのかもしれない。

「あー……ごめん」

とりあえず謝ってみる。とりあえず、というのが謝罪する心の有

りようとしてどうなのかと思わないでもないが、この不馴れな沈黙を回避出来るなら背に腹は代えられない。

「瞬が謝る意味がわかんない」

「はあ？」

「じゃあどうしろっつーんだよ。」

「瞬、さあ。俺が先に逃げて、本当にそうしたら瞬は、もう脱出しようなんて思わないんじゃないの」

確信的な言い方をされて、迂闊に千代に質問を投げ付けた自分の軽率さを後悔した。

「…」

これに無言で応えるのはその通りだと言っているようなものだ。

千代が先に逃げるなんて真剣に考えてはいなかったからさっきの台詞があるのだが、仮にそうだったとして、その後俺が脱出を試みる可能性は低い。

脱出、よく考えてみればそれよりも他に俺がやりそうなことに想い至る。

「なんだかんだ言って人の事気にするじゃん、俺を無事に逃がす方に集中すんじゃないの」

「なんで気付くんだ、この…。」

「バツが悪い。」

否定出来ない程度には千代が言ったそのままに行動する自信が、そんなものなくていいのだからあった。

ヒーロー気取りなんてそんなカッコイイものではなくて。もしかしてそうしたら、満たされるかもしれない気がして。自分に絶望することを行い訳にしないで済むならそれは、俺に取って、他の何より価値がある、それだけの自己満足で、なのに。

それだけなのに、なんで。

「一緒に行こうって言ってよ」



千代の言葉が、そうじゃない選択肢を提示する。

そっちではなく、もっと暖かな別の場所に行こうと。

もうとつくの昔に目を向けることを諦めたはずの光とか、信じようとしていつだって直前で駄目だと言い聞かせてきた、信頼とか、甘えとか。

俺の心理的な問題なのに俺以外の人間が哀しそうにするのは、どうしようもないのにどうかしたい、矛盾で構成された分厚い雲のようだった。それとも『俺の問題』なんてのが、そもそも思いつき上がりだってオチなのかもしれないが。

俺の選択によっては、千代が傷つく。そういうことはきつと普通に生きていれば普通に有り得る事なんだろう。あいにく普通じゃないから無関係だと思っていた。

あんなひねくれた言い方じゃなくて良かったのだ。千代と一緒に逃げるのを大前提にしている、だから『お前はお前で勝手にしろよ』みたいなノリに、無防備に傷付いた。もっと千代を信用して良かったのに、俺は俺が傷付きたくないからああ言った。

お前だけ今すぐ脱出するのもアリだと。

それは自覚のない防波堤だ。

分かってくれなんて虫が良過ぎる。

全部じゃなくても心を一瞬でも共有出来るから、人は諍いとか忘れたふりをして、寄り集まって、密集したって、なんとなく当たり前っぽい感覚で生きていけたりするのだろう。立派なことは何にも知りはないのに、そんな三文哲学みたいなことをうっかり考えて阿呆らしくなる。それでも知らないなりに傷付けたくない願って、片隅でそんなこと祈りながら、反面冷静になればそれが無茶苦茶な願いだって十二分に理解しているのも事実。

けど、まあ。千代に防波堤を張るのは、暫くナシだ。

「ああ。一週間後だ。最多の警備員とついでに客の前で、逃げるぞ」「了解」

望み通りと言いたげな千代の短い返答は、これからの期待が混じ

るせいで言葉以上の響きを持っていた。微かな敵意と挑戦と高揚感。空気を媒体に伝染してくる。

「優等生なんて、奴らの評価も当てになんねーな」

飾りつけのない感想を呆れ半分に漏らすと、千代は何も言わずに当然の笑みをその顔に浮かべた。

当たり障りのないレールの上を歩くように見せかけて、実は脱線している。施設の奴らはこいつを優等生と称して飼い馴らしているつもりでいたのだから、なんともおめでたい。

「…日本人じゃねえ」

「うん？」

部外者が訪れるだろうと推測を元に、パソコンを開いて数分。

「見るよ、これセキュリティ保護されたメールだけど」

「ええ？それもハッキング出来んの？保護する意味な！」

すっかりツツコミドコロは押さえて、千代が画面を覗き込む。

「英語か、良かったマイナー系は読めないし俺」

「あー俺はタグに使う単語くらいしかわかんねえ。このメール重要そうか？半年くらい前からやり取りが急激に増えてる」

「ん、うーんちょっと待って。初めの方から読んだ方がいいかな、半年前、と…」

ぶつぶつ言いながらメールを読み進めていく様は、一見何とも平和な光景だ。

「最初の方は、大した話はしてないね。向こうの学者とこっちの学者の個人的な情報交換ってところ。その後は……うわ」  
「なに」

「ここ、『AX-58』。俺たちの体内にあるウイルスのこと。え、…あー、ビンゴだ、瞬」

千代の指がスクリーン上の『AX-58』の文字をなぞって、そのままなぞった先に、あった。本来なら、書かれる筈のない、名前

が。

S y u n   a n d   C h i y o

「存在しないことになってる俺たちの名前が出てる…これやバイメールだなあ。ハッキングしてんの瞬じゃなかったら大変なことになるよ。生き残りだとか、施設に閉じ込めてるだとか、暴露しすぎ。俺たちってプライバシーないねえ。えーっと、で、…」

突然水を浴びたように千代が青ざめて固まった。

「どうした」

書かれた内容に危惧が走る。

「千代」

「だから…」

メールに釘付けになった千代は何かに納得したらしく、音にならないほど小さくそう零した。そして、視線を落としてそれから上げようとはしない。

「千代、何が書いてある」

静かに言った。

どうせろくでもないことなんだろう。

「全部…」

「ん」

ちゃんと聴いてる。俺も同じだから、あんまり真に受けんな。

「そういうことだったんだ…」

ああ、ほら。

「……仕組まれてた…」

期待なんてするもんじゃない。

「二人を無償で引き渡すって」

そうか。

「同時に」

…そうか。

だからつまり、今千代と俺が一緒にいるのは、そのための準備で

しかなかったのだろう。

俺たちはまるで『モノ』だ。

同時にくれてやるなら、同じ場所にあった方がいい。そういうことだ。

情が湧いたとか、そんなのは建前で、厄介払いが出来ると諸手を挙げて喜んだことだろう。

研究もし尽くして、もう用がないのに殺すのは後味悪いからなんとなく生かして。そんな面倒から解放されるのは、さぞ嬉しいだろう。

千代、そんな奴らのためにお前が傷付いたりするな。

「素直にさ、嬉しかったんだ。瞬に会えるって言われたとき」

過去を懐かしむように千代がぼつりと言った。

「……俺に言わせれば迷惑甚だしかったけどな」

励まし方なんて知らないから、俺は愛想もなく愚痴る。でも過去形で紡がれたその意味を、千代はあっさりと悟って微笑んだ。

「千代、気にするな。気にするほどのことじゃねーんだから」

知らぬが仏だっただけで、どうせそんなのは世の中にゴロゴロしている。これまでも、これからもきつと。そんな中で。

「俺たちは選べるんだぜ。仕組まれてる流れに付き合うのも逆らうのも」

無闇に信じたり夢を見たり、何だって。

俺たちは多分もつとがむしゃらに自由でいい。

## 7・to be free

「昔クリアしたテレビゲームのさ、」

「……」

「戦闘シーンのBGMが頭の中で流れてんだ、さっきから」

今から緊迫度マックスで逃亡劇を始めるぞって瞬間に、そんなどこかの抜けたコメントが聞こえてきた。そういう奴だって分かっていたつもりだったが、どうやら俺の解釈は甘かったらしい。

「千代、リプレイは出来ないんだぜ」

「おっ。ウマイこと言うね相棒！」

なんだそのテンション。

シリアスモードになっても千代はキャラを崩す気はまるでないらしい。

「今日は満月だよね」

相変わらず不親切な話し方だな。どうやったらゲームから月の話になるんだ。

「ああそうだっけな」

「雨は降りそうにないね」

「…ああ、そうだな」  
だから。

「脱出成功したらさ、」

ああ。

「ガラス越しじゃない月が見れるよね」

なんかもうゲームとかBGMとかウザイこと言いやがる、なんて、一気に飛散してしまった。

それがお前の望みか。

儚い。

予定通りに事が進めば、俺たちは6時間後には外にいて、自由の身だ。なのになんた360分先の未来に描いているのは月の光だけ。何を望んで良いかなんて、結局のところ俺にも千代にも分かったもんじゃない。

閉ざされた十年。諦め方が上手くなった代わりに、欲しがる方法はない出せない。

だけど。

「うわーめっちゃ楽しみだなー。いいなー満月」

これだけ能天気到手放しで喜ばれると、それで良いという気がしてくるもまた事実。

「気楽だなお前は」

「まあねー」

曖昧な声のトーンと伸ばされた語尾が、一層緩さを強調する。

「なんか…平和だな」

実際の状況は全然平和じゃないのに、それどころかこれから対極を味わうのに、なんだってんだこの緊張感の欠片もない空気は。

「いいね一人じゃないって」

いつも通りのくだけた言い方で、会話が噛み合っているんだかないんだかの返事が紡がれる。いつも通りの言い方で、でもそれがいつもより真剣な意味を含んでいる事には気付いていた。

「千代、もし…」

「良くない方は聞きたくない」

だが生憎俺は、脱出が失敗する可能性に目を瞑ってそのまま実行出来るほどお気楽じゃない。

「聞きたくないなら耳でも塞いどけ。俺は勝手に話すから。けど後で聞いてなかったとかって恨むなよ」

「…なんだよそれ。聞くしかないじゃん」

千代は不貞腐れながらもどうにか聞く体勢を作る。

「手短に話すぜ。そろそろ時間だからな」

「出来ればカットしてよ。俺が聞きたくないこと分かってるだろ」

「二人とも失敗の可能性をか？それとも」

「後者」

言い切る前に即答された。それはどちらか一方だけが逃げ切れない状況に陥る可能性だ。有り得ないとは言いついていいことだ。なおさら今話しておかなければその時右往左往して結局共倒れだなんてそんな馬鹿馬鹿しい事態を招きかねない。

「はつきり言っぜ。お前が逃げ切れなくなっても俺が行けそうだったら、俺はお前を切り捨てる。だからお前も俺を顧みたりするな」

「冗談だろ」

「冗談に聴こえるかよ？」

挑発するように笑い飛ばしてやった。

苦虫を噛み潰したような顔ってこういうのをいうのかと、千代の表情を見て思う。だがその不満を汲んでやるつもりはない。

「行くぞ。時間だ」

立ち上がってガラス戸に手をかけて。ゴーサインを出した俺の聲は、まるで業務連絡のように硬かった。

ああクソ、思ってもいない事を言っただけだ。

「瞬」

凜として一点の振れもなく俺の隣に千代が並んだ。

「今の聞かなかったことにしとくよ」

俺を一瞥もせず、千代は硬化ガラスの先を見つめながらそう呟く。「馬鹿が。前半はともかく後半は聞いてけ」

吐き捨てるように了承を強制する俺を、千代の視線が掠めた気配がして、その後肩を叩かれた。

「…んだよ、」

苛々と向き直ると、千代が人の悪い笑みを浮かべていた。

「失言。馬鹿だなー瞬」

へらつと気安いコメントを寄越して、そこには失笑さえ交っている。

「、なにがだよ」

何が面白いのか、笑いを堪えている千代の顔に心底むかついた。もう知らねえ。話を続けるのが面倒になってドアを引き開ける。ガチャンと、始まりを示す音がした。ロックの解除コードをホストコンピュータに潜り込ませたのは一時間も前だ。この調子なら他の解除コードも上手く回っているだろう。幸先良い徴候に少し機嫌が浮上した。

「あのさー、」

勘弁してよ、とでも続きそうな千代の切り出しは、気怠げに俺を引き止める。

「前半は『俺が切り捨てられる話』。後半は『俺が瞬を切り捨てる話』。で？前半はともかく後半は聞いたとけって？後半の方が重要？それどういう理屈だよ。どうせさ、」

失言、って。

「瞬はさあ、人を足蹴にしてクールに決めれるほど器用じゃないじゃん」

それか。

「見捨てる気がないならわざわざ言うなよあんなこと。それよりかさ、『俺はぜってー見捨てないから、千代、お前も俺を見捨てるな！』とか良いと思わない？」

…全く思わない。

「ダセエ」

「あー…、うんまあちょっとダサイね。ないね。格好悪いね！」

いやお前そんな力強く認めて良いのかよこの流れで。俺もムスツとしてれば良いのに千代の話の行方が心配になってつい気を抜いてしまう。

「だろ、格好ワリー」



丁寧な相槌まで打って。

「まあでもこの際格好とか置いといてさ！」

「強引だな！」

華やかな笑顔と短絡的な結論に張り合う気も失せた。

「一緒にやなきや意味ないんだよ」

「気持ち悪いこと言うな意味ならあんだよ俺にはな」

一息に言う。そうだ。意味はある。

「二人して脱出失敗に終わるってのが、一番意味がねえ」

嘘だ。

意味ならもう。充分過ぎるくらい。

「なあ、千代。今ここにるのがお前で良かったと、俺は思ってる」

「え、あ、どうも……。いや別に、てゆーか、あーえっと俺もそうだがどキヤラじゃない事言うなよ、真剣照れるし、なんだだよ」

「お前に会ったから、俺はまともに生きてみる気になったんだ」

「いいってもう。ありがと分かったよ」

自分は当たり前な顔で似たような台詞を吐くのに、言われるのは居心地が悪いらしい。目を合わせようとしてもしないで制止の素振りを見せる。

「けどそれとこれは、別物だ」

違う。同じだからこそ。

「別物？」

「このガラス戸の向こうは、感情論に足下を掬われて樂觀視できる状況じゃないから」

「つまり？」

「逃げれる時は逃げる。絶対に振り返るな」

千代が溜め息をつく。

「瞬は瞬でしかないってことだね要するに」

大方外れてはいないが理解して欲しいのはそこじゃない。

「平行線だよ、瞬」

「なにがだよ」

「俺は俺が信じた通りに行動する。逃げたきや逃げるし、…そうじやないなら留まる。瞬だつて、そうだろ」

「…」

言われるまで、気付かなかつた。

無理にでも、千代だけでも逃がしたいのは、俺の我侭でしかない。そんな簡単なことに。

「俺にも選択権があるだろ。俺の未来なんだから」

静かな口調で千代が言う。

「俺は自分を欺いてまで逃げる真似はしたくない。自分を責め続けて生きなきゃいけない未来なんて欲しくもない」

同じことを思っていた。1ミリの狂いもなく。

“後悔したくない”。

「脱出に失敗するより、切り捨てるなんて行動をとる方が、きっと後悔する」

そうだろ。千代の目がそう訴える。

共感してしまう為に返す言葉がなかった。

「俺の未来は俺に任せてよ」

逃げる、なんて言わずに。

「…ああ、そうだな……」

千代にとって良いだろうと思つた事は、つまるところ俺に都合が良いだけの話だつた。とりあえず千代さえ逃がせれば、最低限の満足は得られる。

とりあえずアイツは逃せたんだから。と。

とんでもなく利己主義な言い分だ。それを千代が迷惑がるなら余計に。

「もうなんも言わねーよ。悪かつたな」

信じれば良いだけなのか。ただ。

そうやって、ふわりと笑う真実を。

「じゃ、改めて、行くぞ」

「了解」

ガラス戸の一枚目を抜けて、仰々しく備え付けられた二人分の防護服を視界の端に収めた。恐らくこの先、誰も袖を通しはしないだろう。

そして二枚目の扉。何もなかった通路。一枚目と三枚目を隔てるこの空間は、「隔離」という言葉を嫌でも思い起こさせる。埃一つ落ちていないせいでこの体積何立方メートルだかの空間は、空間として存在する事にこそ意義を持っているのだとうざったくも主張する。感染者と正常者の間に、一体何億の原子分子が介在しているのか。どれだけの空気の層で、俺たちと他者を隔てているのか。あくまでフラットなこの通路は、それ故に遠い距離を物語る。その重たい空気の層を自らの足で蹴散らして行くのは、快と苦の両面を会わせ持っていた。

施設の設計者は、何を思っていたのだろうか。届かない世界を見せつけるようなガラス扉。進むほど自由に近づく気がする一方で、何か知りたくもない感情が渦巻いているのを感じた。しかしそれも束の間で、俺たちは三枚目の扉の前に行き着く。掠れたアイボリーの色の割に随分重量のありそうなその扉。

「開けるぞ」

「オーケー」

不敵な笑みと共に千代が短く返事をする。俺は自然と口角が上がって、ついでにゾク、と体が脈打つのを感じた。

ゲームのBGM。

確かに似ていた。

これは、ゲーム。大丈夫だ。いける。

楽しめる。

まさかそんなことを思うとは予想もしていなかった。もっと悩ん

で頭の痛い思いをしながら逃げなければいけないと。そんなのは払拭されて、さっさと飛び出したい衝動に駆られる。

ガチャン。

ガガ：

豪快な音を立て、本来なら全自動で開く扉を力任せに押し開ける。わざわざ強烈な口火を切るのは、今から逃げるといふ合図だ。

さあ来いよ。鬼ごっこをしようぜ。

運悪く扉の前の警備を担当していた奴のぎよつとした顔は笑えた。現状が理解出来ないからかひたすら凝視に凝視を重ね、声も出ず、といった風情だ。

「あつ、どおも。感染したらごめんね！」

千代がしれつと言いつつその後の警備員の反応に吹き出しそうになった。

そりゃあ感染する可能性があると思えばあんな反応もするか。バタバタしているだけで100パーセント無駄な動きだ。おまけに「ぎゃあ」とか「わあ」とかおよそ人間らしくない言葉の連続で、たまに聞き取れても「そんな」、「いやだ」、「そんな」と端的な台詞が漏れるのみ。

人が悪いぜ、千代。

当の本人はにやりと俺に目配せただけで、別段悪びれる様子もない。軽い足取りでひらりと先へ進んでしまう。警備員を気の毒に思うが「感染しない」と言っただけで何の効果も得られるでもなし、そもそも俺の言葉を聞き取る余裕すら欠いているだろう。

まあ発症しないのは時間が経てば分かることだし。

数時間か数日、死の恐怖に怯えなきゃならないのは、俺たちのこの十年と照らし合わせてチャラにして欲しい。

千代の軽い身のこなしが臆することなく前方へ向かって行って、その後ろ姿を捉えながら俺は監視カメラの位置をチェックしていく。カメラはハッキングした位置関係通りに設置されていて、ああ今千代はカメラに捕らえられたはずだ。続いて俺も。これが駆け引き

の第一段階。どこに向かっているかをモニター室に教えてやる。

（瞬と千代、今すぐに止まれ）

施設内に放送の声がかかった。

止まるか、ばあか。

止まる気配のない俺たちをモニターで確認してか、再び同じ台詞が耳を突く。

（繰り返す。瞬と千代、今すぐに止まれ）

一辺倒か。芸のない呼びかけだな。

放送を無視して走る先は、この施設のセキュリティー統括本部。一番人員も多く、守りも硬いその部屋は、俺たちと外の世界を決定的に隔てる壁だ。それを突破しなければ大地は踏めない。

（停止しろ。瞬。千代）

俺たちの行き着く部屋に思い到ったらしい声が、ただの苛立ちと呼ぶにはいくらか度を超した口調で言い放った。

停止…。

まるで人間扱いされていない。

自分の唇が嘲笑の形に歪む。

ヘタクソ。

そんな事を思った。俺たちを止めるには浅はか過ぎる台詞だ。逆なでする、とは気付かないのか。

（今停止すれば咎めない。なかったことにしよう）

ハ。

咎めない…か。つまりこの行動が“罪”か。

俺たちが施設の外で呼吸をしたいと思う事は、なかったことに出る程度の話か。

しかし怒りより先立つ感情があった。

「ラッキーだね」

千代が余裕の笑みで振り返ってそう告げる。それは推測が確信に変わった瞬間だった。

「ああ」

奴らは、俺たちを対当に見ていない。あの話し方は明らかに自分達の側が有利だと信じているものだ。その驕りは隙になる。

どうせ逃げられやしないとタカを括っている。セキュリティは万全で、まして警備の人員も普段の倍以上。大方『間の悪いときに脱走したもんだ』とか呑気に構えているというのが関の山だろう。現状の過信。責任が分散されれば注意力も散漫になる。

「正面突破するぞ」

「all right！」

「日本語使え」

こんなときまで…と睨み付けかけた動作も、千代の浮き足立つような少し紅潮した笑みにかち合って消滅した。

「…落ち着け千代…」

走りながらじゃなければ溜め息の一つ二つ漏れるところだ。

こっちまで冷静さを欠いたら結局プライマイゼロじゃねーか。

「うんごめん！」

ごめんじゃねえよ。全然落ち着けてねーじゃねーか。

「気張り過ぎ…」

「瞬はクールすぎ」

はしゃいでいると形容して差し支えない千代の弾んだトーンに調子が狂う。

「冷静に越した事ねーだろ」

千代の返事を聞く前に、機械の作動音が耳に届いた。

「何の音？」

千代が前方後方ひと回りをぐるりと見渡す。

「手動のセキュリティを作動させたんだろう。気合い入れて走れ」  
詳しい説明をしないでも一秒後には何が起こるのか分かる。

「うわ。趣味わる」

千代にかかる「趣味わる」の一言で一掃されてしまうそれは、言う間でもないが決して趣味で作られたものではない。目測10メートル強の感覚で通路が遮断されていく。シャッターなんて可愛ら

しいものでじゃない。壁の上下から、規則的に並んだパイプのような突起物が出現して、それが互い違いに合わさっていく。

「檻じゃん」

見たままを千代が呟いた。

「いいから行けるとこまでは止まるな」

大層な仕掛けであつても今まで一度だって使う機会はなかった代物だ。いくら10メートル毎に設置してあつても肝心の操作がマニュアルではスムーズな作動は難しいだろう。それを裏付けるように檻の形相を示している場所はもう遙か後方だ。前方の天井と床を見る限り、同じ仕掛けが埋まっているのはほぼ間違いないだろうから、それが動かないのは単に操作者の不馴れが原因だろう。

俺たちが通路を走り抜ける時間と、操作完了までの総合計の時間を算出できていない。ぎりぎりで行く手を阻む筈が、ただ俺たちの後追いの遮断に留まっている。

けどそろそろ…

止まるなと言った手前多少気まずい気もしたが、一秒を争うから何も言わずに千代の腕を思いっきり引いた。

「うわっっ」

反動で千代の実際の体重以上の力がかかって、俺も千代もほとんど同時に尻餅をつく。

「っ！なに…」

なにするんだよと言いかけた千代が言葉を呑み込んだ。

目の前の檻が、すごいスピードで閉じられたからだ。ゴウンと腹に響く音が通路を揺する。あのスピードで閉まるその渦中にいたら、上からと下からのパイプに巻き込まれるのは必至だったろう。その最悪からは逃れたが結局俺たちは檻に行く手を阻まれる結果になった。かといって引き下がる気もないから、すぐ後ろのまだ閉めるかどうか考えあぐねているような檻が閉じられるのも時間の問題だろう。要するに俺たちは10メートルそこそこの通路に閉じ込められたということだ。

「ありがと、…って、これ…殺す気かな」

あのまま千代の腕を引かなかったら、そうなっていた可能性がないとも言えない。

「串刺しか。シュールだな」

それでもこの方が、にこやかに送り出されるよりよっぽど真実味がある。

現実には、そんなもんだ。

「シュールじゃ済まないって、やりすぎだよ」

呆れを通り越してマイナスまで下がった千代の声は幾分か冷たい。確かに目の当たりにすればその『やりすぎ感』は否めない。否めないが、想定はしていた。逃がすくらいなら、死を。感染者の存在を明るみに出すくらいなら、たった二人殺すくらい……。

感染者である俺たちがわざわざ自分は感染していると吹聴するのもおかしな話だが、ごく僅かでも不安要素があるなら摘んでおきたいというのがお偉いさんの見解だろう。かなり不本意だが、俺はそれが理解出来る。本質的に俺も合理主義者だからだろう。社会の滞りない循環のために、黙殺すべきものがこの世にはある。その一つが俺たちだっただけのことだ。国内だけならまだしもグローバル化が謳われて昨今、脅威のウイルスを蒸す返すのは他国の目を意識しても封じておきたい痛手だろう。

そこまで考えて、ふと思いつく。

あのメールのやり取りは、海外とだった。

それは。

「ついに閉じ込められちゃったね」

千代の声で現実を引き戻された。振り返れば背後2、3メートルのところ、規則正しい間隔を開けて床と天井を繋いだパイプが鈍く光っている。

マズイ。

「瞬？」

「ああ、…」



迷いが生じている。

本当に、逃げて、良いのか。

「どうした？」

俺は何か大事なことを、見落としているんじゃないのか。

## 8・TRAP 1

「瞬、どうしょつか？」

檻の中だなんてのは何処吹く風で、千代の口調はふわふわと軽い。こつちが頭悩ませてるってのに、へらへらしやがつて。多分これは俺の勝手な感情だから千代に非はないのだが、……こういう感情を世間では『逆切れ』とか言うらしいが、呼び方なんてなんだっていい。ム力つくことに変わりはない。

「うつせーな今考えてんだよ！」

考えてるのは脱出の方法じゃなくて、今更『逃げるべきか否か』という間抜けな問題。

「うんじゃあ俺も考えよ」

「いやお前は考えなくていいから」

下手に名案を出されたりなんかしたら「やっぱり逃げるのやめる」なんて言いにくくて仕方が無い。そもそも現時点で既に十分言いにくい空気が出来上がっているのだ。

「なんで。瞬に任せきりなんて俺すげー良心痛むし」

アホか良心痛めなくて良いんだよじつとしてるばーつとしてる何なら寝てろお前。

（瞬、千代。妙な動きはするな。大人しく戻るなら今回のことは見逃す）

なんだかんだコイツらもノリノリだしなあ…。

俺たちの受け渡しは海外との取り引きで、もし万が一俺たち感染者が消えたら何が起こる？

「見逃すつてさ。お気楽発言だね」

ああ、けどお前ほどじゃねーよ。

馬鹿だった。取り引き相手くらい洗つとくべきだった。俺たちが消えたらまずどこに漏れる？どのくらい騒がれる？

（今からそこへ向かう。繰り返すが妙な真似はするなよ）  
マズイな。時間がない。

B級メディアにすっぱ抜かれるか、もつと悪けりや感染者の生存を信憑性最もらしく有力メディアに載せられるか。お咎めナシ、つてのは有り得ないだろ、さすがに。

「……瞬、」

だからちよつと黙って……。そう喉まで出かかって、しかしいつにない千代の硬い声にふと顔を上げた。

「！くそ！！テメーら狂ってる！！！」

一息に吐き捨てる。檻の向こうに自らを守る為の感染防護服に身を包んだ施設の奴らが見えた。それから明らかに殺傷能力が高い銃口がこちらを向いているのも。

「冗談きつい……」

俺はお前のそーいう諦めきってるみたいな冷ややかな笑顔好きじゃねーんだよ、千代。冗談だなんてこれっぽっちも思ってたねーくせにやってられない、とか。どうでもいい、とか。そんな風に見える。千代！逃げるぞ！」

もう知らねえ。施設の管理者たちが、傷付かなきゃいいって俺はずっと馬鹿げたこと考えてた。

『撃て！！構わん！！』

『は、どちらを、……』

別に誰だって事情があるだろう。責めるのも下らなかった。

『瞬だ、あいつが千代を唆してる！！』

別に怒りとか感じたことも無かった。

『撃て！！』

『、は！』

けど今は、すげー哀しいよ。

『なっ、なんだこれは！？』

白い煙が吹き上がる。

わざわざ武装したのにあいにくだが、俺は保険をかけずに逃げ出すほど呑気じゃない。

「千代、離れるな」

「えっ？あ、わかった」

勘違いしてんだよ、あんたたちは。ここはもうあんたたちのテリトリーじゃねえ。

『スモーク！瞬か！ふざけるな！！』

なあふざけてるのはどっちだ？

『待て、撃つな！危ない！！』

危ない。その表現は間違ってる。

気付けよ、リスクを負えないことそのものが、リスクを生み出すってこと。

ガコン。

ガ！……

『何の音だ……』

白々しいね、この音の正体なんて一つしかないだろ。

「行くぞ、千代」

「がつてん！」

白に覆われた視界の中で、見えない千代の腕を引いた。千代が笑う気配があつて、俺も笑う。

閉じられていた檻が解除されていく。ここは表向きは敵の要塞。だがほとんどデジタル化された設備のおかげで、実際には俺が仕掛けたおびただしいトラップが埋まっている。

撃てないなら正面突破に躊躇いはない。

「走れ千代」

「瞬かつこいー」

ああそうかよ。そのコメントは悪くないな。

「千代速度落とせ。確かこの通路…」

言いかけた直後にドゴツと鈍い音がした。

「この辺で右に曲がってたような、……、遅かったみたいだな」  
今のはあれだな、お約束ってやつ。

「……うん…激突した…」

だろうな。笑顔のまま突っ込んだのか、気の毒に。

「やべー鼻血出たかも」

「おい走りながら聞くから、とにかく曲がって進め」

「あはは鼻血出しながら走るってミラクルだね」  
自分のことだろうが。

「なんでもいいから走れ」

「走ってるって。ちよつとは心配してよ」

「……」

「瞬ーおれ鼻血出しながら走ってたよ、プライド捨ててんだよ、  
安否確認してよ」

間伸びした口調だから本気で言ってる訳じゃないことくらいは察せるが、いかんせん面倒臭い。まず千代がそういう種類のプライドを持っていたのにびっくりだ。とにかく安否確認の必要は全くもって無い。

「瞬ってば、……。ごめん、せめてツッコミを入れて下さい」

はあ？ 掴めねーよ距離感。まあ何か言っとくか。大分クリアになった景色の中で振り向く。

「千代、わりい……、って、鼻血出てねーし」

「あっほんとだ。よかったー」

やってらんねえ…

「楽しいね」

言葉の割に真面目な響きを持って、それは千代の口から漏れる。

「そりゃよかったな」

「うん。楽しい」

命懸けなのに。

楽しいって言葉は、もつと違うシチュエーションの為に用意されてるもんだと思ってた。

「行くぞ。感想なら後でいくらでも聞いてやるよ」

分かってると言うように千代が笑う。砕けたその仕草が好きだと思っ

た。「瞬！止まれ！！」

進む先で、真正面から切羽詰まった声を上げたのは見知った顔だった。白衣の男。俺と千代を引き合わせた罪深い一人。

「せんせえ、いいの？感染するよ」

そんな風は無防備じゃあ。ゆっくりと歩み寄る。

「もうお前も知ってるだろう、瞬。感染はしない」

俺と対照的に足を止めて、ひたと自分を見据える千代をちらりと見て、男はそう言った。

「あんたの考えてること……分かんねえ」

知りたくもない。

「分からないままでいい」

無表情に言った男の目元が幾分か和らいで見えた。それは時が経てば、気のせいと振払えるほど僅かな時間の表情。

「あんたは本当に俺たちを止める気あんのか」

「どう思う」

「……知ったこっちゃねえよ」

恐らくもう、この男と会うことはないのだろう。漠然と知った答に、懐かしい痛みを感じた。

「恨んでるか」

この場所の全てが、過去になる。

「別に」

「お前には、俺を殺す権利くらい、あるんじゃないのか」  
そうかもしれないし、違うかもしれない。

「……アホか、テメーは」

俺が言うにとしては棘の抜けた口調だった。多分言った自分が一番びびった。

「、権利なんて、どうだっていいことだ。だいたい今俺たちは急いでる」

この男は好きじゃなかった。嫌いじゃなかった。

「そうか、そうだな……」

安心したような、同時に傷付いたような声を落として、それでも男は何かに納得したようだった。

## 9・TRAP 2

「なあ、」

白衣の男に声を放る。僅かに過った疑念。

なあ、もしかして。

「……あんたも逃げたいのか」

俺が低く呟いた問いに、大人しくしていた千代が視線を移す気配があった。しかし男は黙ったまま。

「…違うんだったら、別にいい」

引き下がった俺に何か言いかけた男が実際口にしたのは、多分言いたかったことではないだろう。

「エマージングデイズ。E、m、e、r、g、i、n、g  
D、i、s、e、a、s、e」

「なに？」

「Emerging Disease。覚えて行け」  
行け。

そう言った。分からないことは分からないまま。多分これは、墓前で持ち越した。どうせあんたは言わないだろう。残される男に何が残るのか、俺は知らない。

引き止めるべき立場にいながら道を開ける理由、意味。

分からない。それを盾にして、男の言うままに道をすり抜ける自分も。

隣を過ぎる瞬間に白衣の男は確かに笑った。

心から、満足げに。

「瞬、先へ進もう」

千代が言った言葉が、物理的な話なのか精神的な話なのか判断出来なかった。



ああクソ、違う。そうじゃない。

一度は男を置き去りにして、 だけど。

覚悟決めました、みたいな白衣の元へ数歩戻って、その腕を力任せに引く。

「、瞬、なんだ、…」

「あんたも来るんだ」

「は、何言っ…」

「早くしろよ！時間がねえ！」

撒いて来たばかりの武装した奴らが、男を撃たないなんて保証はない。

「だから俺はお前たちを逃がす為にー！」

「くだらねーこと言ってんじゃねえよ！」

殴ってやりたいがそんな暇もない。

「俺たちが生きる為に犠牲になるのがあんたなら、あんたの自己満の為に犠牲になるのが俺たちだ。どっかで見たような泣ける話なら、俺と関係ないところでやってくれ」

千代が苦笑した。のどかなホームドラマで見るような、苦さなんて欠片もない苦笑。

「早くしなよ、おじさん。撃たれたくないでしょ」

そしてついでに半分呆れたようにぼやく。

「やっぱ甘いよ、瞬」

それでいいと認めるような言い方だった。

「うーん時間潰したね。視界良好だよ」

照準を合わせるのにも問題がないほど。

「テメーのせいだ、せんせえ」

背後を振り向けば武装した施設の人間。毒づいた俺に白衣の男が息を飲んだ。

「…どうして、……」

「ああ、」

仕方ないだろ、生きてる気がするんだ。

「せんせえ面白くないのかよ、勿体ねえな」

「うん、もつたいない」

千代が柔らかな口調で繰り返した。

優等生より、共犯者の方が魅力的だ。そう言ったあの時と、同じ顔をしていた。

「市谷、どういうことだ」

武装した一人が白衣の男に向かって言う。

イチタニ。十年近く俺の側でうるちよろしてたこの男の名前を、俺は初めて耳にする。市谷、それが『白衣の男』の名前らしい。馬鹿な話だ。市谷は、自分の名前も明かしてない。俺も聞いてみたことすらない。人間のために、逃げ道を開けたのだ。

「瞬と千代を会わせたいと言い出したのはお前だったな。拳げ句逃げる手伝いか？」

市谷は暫く沈黙して、何の事件も起こっていない普段の、冷徹そのもののような無表情を分厚い防護服に向けた。

「まあ、そんなところです」

あまりにさりりとした発言だった。

相対する暑苦しい防護集団の前で、市谷の軽そうな、言い換えればとてつもなく無防備な白衣が涼しそうに揺れる。

「いい加減、うんざりしていたところだったので。監禁趣味は私にはありませんし」

銃口が、こちらを向く。

体の奥で危険信号と拍手喝采が混じるような、どっち付かずな高揚感が沸き上がった。

せんせえ、あと二分、伸ばせ。

危険なくらいが、いい。

過ぎていく刹那は全てギャンブルだ。  
息をすることも。

「市谷、感染してもいいのか」

今喋った奴は下っ端か。感染しないと知らないらしい。

「ああ書類読んでないんですね。そんな動きにくいもの着込んでいや、あれは最重要機密でしたっけ」

施設の人間をさっぱり覚えていない俺には、どいつが上司でどいつが部下かが分からない。じゃなければ全部替えのきく駒か。どのみち顔まできっちり覆われた防護服では判然としない。

「書類？」

「あー…、知らないならその方が良いでしょう。こちらには資料が回っていないようですから」

資料が回ってくるとしたら、恐らく千代が居た施設から。

「何の話だ、資料とは？」

「内容を要約すれば今現在あのウイルスは差し迫った脅威ではないということだしてね。問題はウイルスよりそれを取り巻く人間のほうですよ。まあそれは…、現状を見れば明かではないですか」

市谷は淡々と話しながら、目の前の防護服と凶器をざっと見渡した。見られた何人かが小さくたじろぐ。

（市谷、黙った方が身のためだぞ）

威圧的な声がスピーカーから流れた。

…今更、

市谷の唇がそう動いた。声が聞こえなかったのは、それに被さるように非常警報が鳴ったからだ。

俺は千代に目配せする。

視界を奪うのは何もスモークばかりじゃない。もっと原始的な方法で事足りる。

照明が落ちた。

鳴り響く警報がどんな音よりもここに相応しい。



視界はきかないが、セキュリティ統括本部に近づくにつれて警報は小さくなる。本部の人間がそこだけ警報を切ったのだろう。事態の対処をするために。対処すべき事態が『感染者の脱走』だと分かっている、しかも主電源が他と違う統括本部は照明も落ちていない。施設内にいる人間が外に出るためにはそこを通るしかないから、罠を掛けるなら当然そこだけで十分だ。それに感染者が辿り着くまでには少なく見積もっても10分ある。

そんな圧倒敵有利な状況で、ネズミ捕りを仕掛けない奴なんているだろうか。

一応のところ武装集団は巻いたようだ。それでも俺たちは暗闇を走る。と言っても全速力って訳にはいかない。

今更イチタニを放り出してくつても、……ねえよ。確かにその選択肢は。確かに。

ばこんっ、がこっ。

ああ、それはそうなんだけど。

「瞬！。イチタニさんがちよつと……、その……」

せんせえ。勘弁してくれ。

「つて！」

ばんっ。どこっ。

……マジかよ。

「瞬……、ちよつと、……待ってあげたり、とか、……」

千代が躊躇いがちに俺を伺ってくる。

「しねーよアホかテメーは！一刻を争ってんだよ！！止まんな走れ！」

いるのかホントに。こう……、運動神経皆無、って奴は。よりによって、こんなとこに。

「いいんだ千代、瞬、先に、行つて、くれ、…はあ、」

市谷が弱々しく呟く。後半の息切れは、なんだ、聞かなかったことにして大丈夫な種類のボケか？オイどうなんだその辺、勘弁してくれよ。

「行け、気に、…はあ、はあ。する、な、」

「格好つけんな、格好ワリーんだよオッサン！」

我慢できずについ叫ぶ。照明を落としていくら姿を隠したところで、こんな大声でツツコミ入れては台無しだ。俺はここだ。さあ撃てよ、どこからでも。どこそのアクション映画じゃないんだ、そんな茶番は願ひ下げだ。巻いたからといって声が聞こえないとは限らない。だが言いたい。せんせえあんたともなく足手纏いだ。

なぜ真っ直ぐ走れない。

ひらりと軽快な白衣を、それこそ悪くないと思つたのは数秒前だ。

しかしそれは過去だ。数秒前を懐かしむなんて気が滅入る。振り返つても市谷の表情は伺えない。真っ暗だからだ。だから市谷は走れないのだろう。見えないから。勘と…、やっかいなことに体力つていう根本的なものにも問題がありそうだ。ばんっ。それにしても一体何にそんなにぶつかるんだ？

「せんせえ、あんたも銃持つてんのか？」

市谷が奮闘しているであろう方向に見当をつけて話しかける。がこつ。

「…、いや」

否定らしき言葉が返ってきたものの、直前の間は多分息切れのせいじゃない。

「それは、『今は』所持してないって意味であつてるか？」

つまり持つ持たないは各自の判断に委ねられるにしろ、施設の人間それぞれに銃が行き渡つていたという意味で。

「ああ、すまない」

右の方で千代がふつと笑う気配があつた。まったく、俺も笑いたい気分だ。すまないだつて？その謝罪は、銃を向ける対象がおれたち

だったという以外解答を持たない。

まあいいけど。俺も千代もまだ生きてるし、何にしろこいつは撃たなかった訳だし。とにかく、今のところは。

「驚異だな、…ここで、走れる、っていうのは」

市谷が言った。

「…。普通だろ？…じゃあねーな、30秒だけ止まってやるよ。

つとに、命取りになったら謝れよマジで」

進むのを止めて溜息混じりにばやくと、市谷はやっぱり有り得ない選択肢を提示する。

「だから、先に行け、って。命取りになったら、責任の取りようがない」

「はあ？別にそんなの期待してねーから安心しろよ」

市谷に取っては良い知らせだろう。俺は責任を市谷に要求するほど呆けちゃいねえ。

「だが、…」

ああ面倒臭いな。

「イチタニさん、暗くて見えないからあなたには分からないかもしれないけど、瞬が『だがもクソもねーよ』ってすんごいイライラしてるから、今は黙って息を整えてくれない？」

千代の実況中継みたいなの要求が事実そのままで複雑だ。プラスお前だつてイライラしてんじゃねーか、千代。口調が固まってるぜ。

「わかった。…悪いな」

市谷がそう言つてやつと黙った。

なんなんだよ。

市谷には一生わかんねーんだろう。良いとか悪いなんて、俺にしてみたらどうでもいいことだ。市谷が悪いのか、俺たちが悪いのか、他の奴らが悪いのかなんて、結局は主観の問題だ。言い分がなきゃ善悪は存在しねえ。言い分があれば反対意見が悪だ。世間が正義を主張するなら、俺は悪でも構わない。

「ゆっくり歩くなら問題ねーか？俺の距離感が間違ってなきゃ統括本部まであと2、300メートルってとこだぜ。この先3回左に曲がったらずくはずだ」

暗闇と沈黙とゆったりした足取りで、自分と世界の境界が溶けていく気がする。代わりに思考の働きが妙に活発だ。

存在とは、なんだ？存在を抹消されている俺たちは、『存在している』ことになるのか？

俺は生きているのか？死んでいるのか？生の定義はなんだ？俺を構成しているものと、他者を構成しているものの違いはなんだ？人間とそれ以外の違いはなんだ？この世界はなんだ？現実か？幻想か？どこまでが俺の思考で、どこからがそうじゃない？始まりと終わりとは？時は止まっているのか？動いているのか？

俺のしようにしていることは、一体なんだ？

「瞬」

千代。

「光が見えるよ」

幻想でもいい。

悪くない。俺の目に映るものは、上がっても下がってもこの世界だ。



## 11・Claymore

セキュリティー統括本部……これが…。

光が漏れていたのはここからだ。

なんだ。気分が悪い…。

「瞬。大丈夫？」

ここには光がある。だから見える。たった今気付いたことだが、  
『見えるから幸福』だというのは間違いだ。

俺はずっと閉じ込められていて、だから本当は世界に何があるのか  
なんて覚えてなかった。

人が何億人いるなんて情報は、俺の中ではパソコンのスクリーンに  
映る単なる光の集合体でしかなくて、そのパソコンを作り出したの  
が人間だってことも、正直実感したことなんてない。

「千代、お前はここを通って来たんだよな」

そう言ってから、突然この施設の壁は音を反響させないのだと気付  
いた。自分が発した台詞が、乾いていて空しい。これは愚問だ。そ  
んなのは聞かなくても分かっている。外と施設を繋ぐ場所はここだ  
けなのだから。

千代は微かに笑って俺から目を逸らした。その視線は俺たちが進む  
べき方向に向けられる。千代にとっては、一度は『入る』ために通  
り、再び『出る』ために通るはずの、その部屋に。

「瞬、これがこの施設だ。つまるところ人間の狂気だな」  
市谷が自嘲気味に告げる。

部屋そのものが一つの機械と言っても差し支えなさそうだ。相変わらず通路と部屋を隔てるのは透明な防弾ガラスの扉。部屋の壁面は壁じゃない。無数のパネルだ。青に近い色をした反射パネル。鏡でもない、ガラスでもない、何かエネルギーを吸収するような、それでいて跳ね返すような、気味の悪いパネル…。

部屋の中心に馬鹿でかい塊がある。赤いコードの絡みついた、重そうな、塊。何かの機械だ。なんでか知らないがそれは鎮座した爆弾を思わせる。

なんだよ、クソ。夢も何もねーな、この場所は。

この施設に漂っている空気は、どちらかと言うと死を連想させるものだ。もっと俺の感情に即した言い方をするなら、『息をしていない』を連想させるもの、だ。全く、…残念ながら俺は『死』と『息をしていない』が同義語かどうか知らない。そもそも機械が『生きている』のか『死んでいる』のか、それすら多分『どちらでも在ってどちらでもない』のだと思うくらいだ。ついでに人間も同じようなものだと言ってやれば、大半の人間の重荷は降りることだろう。無言の市谷をちらりと窺えば、ほとんど死人みたいな顔でガラス戸を見ている。

俺も千代も生きているっていうのに、あんたの重荷は本当にそんなに重いのかよ。もし下らない勘違いであんたがこの先押し潰されたとしたって、俺は絶対に笑ってやれないんだぜ。頭は悪くないんだろうけど、だからってその辺分かる気はあんのかよ？

と、言いたいような言いたくないような、こんなことを言ったら若干『良い人』っぽくて気持ち悪いような気がしなくてもないから、言わずにおく。けどせんせえ、俺はあんたを恨んでない。だからそれでいいじゃないか。

「人、いないね。罨かな」

千代が言った。そう、セキュリティ統括本部に人影はない。

「ああ、100パーそうだろうな。分かりやすくいいぜ。普段通りだったら逆に怖え」

人の気配がないから余計死んで見えるんだ。後ろに撒いた奴らも残して来たつてのに、お偉いさん方はもしかして施設ごと破壊する気かもしれない。

カツ、カツ、カツ。

突然耳慣れない音がした。なんだ？

「……あいつ、……」

市谷が悔しそうに囁く。無意識に口走ったらしく、俺にも千代にも聞かせるつもりはなかったようだ。

そして明るい機械塗れの部屋に現れたのは、市谷と同じように白衣を着た、恐らく二十代後半の女。カツ、カツ。ヒールの音。俺たちに気付いていないようだ。女が部屋の中心の機械に触れる。まるで壊れ物を扱うように、指先から手の平へ。静かに、ゆっくりと、何かの儀式のように。そのまま女は瞳を閉じて唇を小さく動かした。短く呟いたようだったが、何と言ったかまでは分からない。あるいは、こう見えた。ごめんなさい。

瞳を開けて顔を上げた女は、別の世界に居るようだった。白衣のポケットから銃を取り出す。真っ直ぐに立ったその姿が、未来と過去を遮断する。

何もかも。今だけのために。

こんな部屋に留まって、一人きり。銃。懺悔。この女、俺たちを殺す気なのか。それとも。

市谷の拳が入っているのが見えた。

「先生、あの女は知り合いか」

「ああ」

「仲は？」

その質問に市谷が苦笑する。正確には、苦笑しようとして出来ずに消えた笑みの名残だけが、表情に浮かんでいた。

「悪く、ないな。向こうもそう思ってる筈だ」

「恋人か？」

「さあ…、どうかな…。もつと殺伐とした関係だったかもしれない」

「あいつ、あんたの言うこと聞くか？」

「いや、」

重たい苦笑だな、本当に。

「お互いの領域を侵害しないのがルールだったんだ、俺たちは」

「そうか」

だとしたらこっちに手札はない。

「あの女、どう出ると思う」

事前策は市谷の意見を聞くくらいか。心許ないが仕方ない。

思案した市谷が諦めたように口を開いた。

「答えない方が良い問いだろうな。あいつなら、何をしても納得がいく」

## 12・pools of blood

「平和的な解決を望むよ、美樹」

ガラス扉を開けて入り口に立った市谷が小さく零した。アナログの鍵も掛かっていないということは、俺たちがこの部屋に入るのは予定内なのだろう。美樹と呼ばれた女が無言でこちらを見る。市谷、千代、俺へと視線を移して手にした銃を僅かに握り直す。

視線のあった俺に向かって腕を持ち上げ、ずっと銃口を向ける。俺はなぜかその場に張り付けにされたようで、体が動かない。女が俺に向けているものが殺意なのか疑問だった。躊躇いも無く引き金を引きそうでもあり、それでいて撃つことなど絶対になさそうでもある。

「美樹、流血は見たくない」

『美樹』が銃をこちらに向けたまま視線を市谷に戻す。そしてこの状況から一番遠い種類の柔らかな笑みを浮かべた。

「そう……。美しい台詞ね」

「…美樹」

「少年みたい。本当のところね、私は貴方の…ずっとそれに焦がれていたのよ」

『美樹』の穏やかな口調は、過去を懐かしむ。

「私たちは既に量り知れない流血の上に生きてる。でも貴方は、血に片腕を浸しても、残りを暗闇に売り渡したりしなかった。……私と違って」

「美樹…、もう惨劇を重ねるのは辞めよう。なあ、……美樹、頼むから、…、美樹」

市谷のどこか焦りの混じった声。何か察しているようだった。胸騒ぎに心臓が強く脈打つ。

胸騒ぎの原因は、『美樹』のふわりと諦めに似た微笑。

「出来ないよ……」

「美樹、」

「無理なの。何もかも間違いだったって、もう、分かり始めてるから」

誰かこの女を助けてくれ。

「美樹、止めてくれ…」

俺から逸らした銃口を自分のこめかみへ。

違う。それは違う。死のうだなんて、やめてくれよ。どうして、どうして、どうして。

突然現れて、分かったような顔をして。分かるように説明してくれよ。心の中では言いたいことが溢れてくるのに、声を発したら終わりがなくて、少しでも動いたら世界が止まってしまう気がして、ただ俺は呆然とすることしか出来ない。

「私は…もう戻れない」

笑うな。行かないでくれ。

「……美樹…」

『美樹』が愛しそうに笑った。

「ありがとう。出会えたことを感謝してる。…貴方への感情は愛じやなかった。

でもどうしようもなく好きだった」

ぱん、とどこかで音がした。

どさりと『美樹』が倒れる。

見れたものじゃない。

血溜まりが広がって…。

血、って、こんな色なのか。

終わりか。これで。

この女の人生は、ぷつつりと切れたのだ。

これが、終わり。

そうか。

世界は動いているのか。

無関係なのだ。

この女の死とそれ以外は。

馬鹿な女。

### 13・meaning

「なんで、わざわざ俺たちの前で死んだの」

千代が呟いた。女が答えることはない。赤い血溜まり。こめかみを撃ち抜いた死体は、ドラマを誘うような哀愁など無い。立ち尽くす俺と千代と、市谷。揺り起こしたり、泣き叫ぶなんてことはない。何もかも、塵一つさえ宙に固まっているようだ。

「こんなのが欲しかったんじゃない……」

無表情の千代が言った。

何の感慨も湧かない。

神なんているのか？

まだ暖かい血液が、地を滑っていく。白衣の白が赤に変わる。

俺たちが自由になる代償。間違ってるのは誰だ？

「行くぞ」

短い言葉で先を促したのは市谷だった。

なんで、あんたが。

俺がこんなことしなきゃ、この女はまだ。

ふざけるなって、狂気の怒りに任せて俺にその銃を向けたって、俺は別に驚いたりしない。それなのにそうならないのは、きっと市谷が肩代わりしてくれているからだ。

俺たちが隔離されていたこと。脱走という背徳。『美樹』の死。俺が知らない、正しいと言えないこの世に溢れた数えきれないこと。矛盾の穴埋めみたいな犠牲。そういう時代で、そういう社会だということ。



ただの一言も責めないのか。俺たちを？

自分が被害者だと言い切る自信がない。

これじゃない。それじゃない。どれでもない。俺は役に立たない。

「瞬」

市谷に呼びかけられる。

せんせえ、あんたが俺にかける声は何ていう種類だ？

愛なんて知らねーけど、この女が大事だったんだろ。なあそうだろう？そのくらい、何も分かんねー俺だって気付くんだけ。俺はどうすればいいんだ？『美樹』、あんなに優しそうに笑っていたのに、なんでそういうことを教えてくれなかったんだ。

俺たちに最後のチャンスをくれるくらい、たった少しだけ気前良くしたって悪くなかったんじゃないのか。

なあ分かんないんだろ。その血の中じゃ、俺たちの、『戻って来てくれ』、なんて。

多分今ここにある、どうしようもなく歪な感情のかたまり。

もう見ることは出来ないだろうけど、もしかしたらこれだって。違うのか？

愛と呼ぶかもしれないのに。

無力だなんて知りたくない。

「瞬、これとお前とは関係ない」

市谷が俺を気遣うように言った。

「……どこをどうしたら、そんな台詞が出てくんだよ。あんたの恋人を殺したのは、俺だ」

道德なんかいらない。俺には、必要なんだ。生きていくのに事実と結論が。

「……きついなあ随分……」

千代が独り言みたいに言った。悪い。でも今俺にはそれが必要なん

だ。

重い、そんなの分かってる。市谷、出来ればそれを、俺に背負わせてくれ。庇わずに。『辛い』とか『痛い』だって、俺のものだから生きてりゃ欲しくもないもん抱えなきゃいけない時だってあるだろ。生きてんだから、そうだろ？

頼むよ。どんなやり方だつていいから、生きてるって、教えてくれ。それが無理なら証明させてくれ。

俺に。

辿り行く全部に意味があることを。

## 14・Don't worry

意味と結論。受け止めようとしてるのに、咎められないせいで視界が余計に悪くなる。

俺はどういうスタンスで動けばいいんだ。たかだか『外の空気を吸いたい』なんて以外に、どんな目的で前に進めばいい？欲しいのは惨劇一つ分の理由。

「瞬」

呼ばれた名前に反応して視線を合わせても、千代は先を繋がなかった。

名前を呼ぶことそのものに意味があったのだろう。それとも説明が必要ないなんてお前は思ってるのか、千代？

遠くを見つめるようにこちらを捉えた千代の目は、何か訴えているようだった。

俺はきつとその意味を読み取らなければいけないのだろう。それは多分、価値のあることだ。そんな感情を覚えながらも結局、目を逸らした。

一人になりたい。

孤独に焦がれるなんて、俺らしくていい。

孤独を強いられて生きて来て、解かれそうになって、またそれを求める。

楽なんだ。一人きりで、未来とか忘れたフリをして、なんとかやり過ごしていく日々が。

空虚な代わりに、他人の痛みに触れずにいられる。

俺が逸らした視線の先で、千代がずっと目を伏せた。なぜかそのまま、千代と言う人間が消えてしまいそうな錯覚に捕われる。何も言わない市谷も、隣にいるのにいない気がした。

俺が欲しかったのは、ただ白い満月が黒い空に浮いているだけの世界だ。

人の死をその為の犠牲と呼ぶには分が悪すぎる。

予感がなかった訳じゃない。だが俺の予感で見るともなければ、血は、あくまで俺たちのものだった。俺の頭の中のテキストは所詮机上の空論で、他者の感情は先の読めない波紋のように混じり合っていて、存在していたはずの境界線を暈してしまう。

最低な舞台に大量の人間を付き合わせてる。そんなこと、思いたくないけど。

「美樹のことは…美樹の問題だから、……瞬、千代…、お前たちは生きていけよ」

市谷が聞き取れないくらいに小さく呟く。

完結するなよ。美樹だって一人きりで生きていたんじゃない。持て余すほど想いがある中で、どうして形になるのがその言葉なんだ。

そうじゃなければ、きつと諦めがつく筈なのに。

「うん」

千代が短く答えた。イエスと言いなから奥歯を噛み締めたその横顔を、哀しいくらいに遠く感じる。

下らないことに大量の人間を付き合わせてると思うのに、目に映る光景を下らないとは思えない。

そういうことなんだ。

この世界から消えて欲しくない何かを、この二人が持つてる。

二人を逃がそう。

それと引き換えになら俺は、他の何を失っても平気だから。

多分俺に取って、『自由』なんて言葉よりも欲しかったもの。

千代や市谷がいることで、俺はこの場所が悲惨さや滑稽さで塗り固められていないと思い知る。

明日もこの世界に温かなものが存在すると疑わずに、目を閉じるこ  
とが出来る。

満月なんてどうだっていい。

「瞬」

返事をしない俺を市谷が呼ぶ。顔を上げれば斜め前に千代の不安そ  
うな表情。

「ああ。心配要らねえよ」

大丈夫。まだいける。

## 15・She Is

無機質な壁に塗れたこの空間で、いつか、脳の中まで無機質になっていくのだろう。暗闇を脱して鮮血を見て、俺たちを先導する市谷の後姿。その白衣の白さが、あらゆるものを寄せ付けずに、独りこの男を連れ去っていく気がする。

「美樹は、駄目だったんだ。どのみち」

彼から漏れ出た言葉の意味が理解出来ずに、反応が遅れる。

「……駄目って、……」

「あいつは、この施設と外の世界を行き来してた。ここに関わる誰よりも頻繁に。外の『今』を知り続ける必要があると言ってた。……」

「俺もそれがあいつらしさだと思ってた」

吐き捨てるような、噛み殺すような、どちらもが共存したような口調だった。

「それで最初のうちは問題なかった。傍目には上手く割り切ってるように見えてたしな」

この場所と、もう一つの広がる世界を。

「だが、ここと都会は違いすぎた」

そのひとにはあまりにも。切り裂かれてしまうほど。

「瞬。隔離に堕ちていくお前がいる一方で、街に並ぶ流行を追う他者の波も、あいつには同じ現実だった」

どちらを正しいとも間違いとも言えないまま、日々は過ぎてゆく。

「そんな中で研究は惨敗、お前たちの体内にウイルスは見つかるのに感染経路は挙がらない。瞬も千代も発症の気配もない。これは実際、俺たちにとって良い報せとは言い難かった。感染力の無いウイ

ルスは売れない。売買を念頭に置く上で、お前たちが感染源にならないのなら、何らかの方法で感染の道筋を人為的に造るしかなかった」

頭を打たれるような感覚に眩暈がする。

「抗ウイルス薬もないってのに、培養するつもりだったの」  
千代の冷静な声が市谷を窺う。

「……ああ。でもそれも思惑通りにはいかなかった。これを話すのはあまり気が進まないが……研究資金も底をついてきて、さじを投げかけたときにお前たちを二人まとめて売ってくれて依頼があったらしい。俺や美樹が聞いたときにはもうそれは決定事項だった」

俺たちの生死もウイルスも、市場経済の一端を担っているにすぎない。

ただ、それだけのこと。

何もかも間違いだったって、もう、分かり始めてるから。

美樹の苦しい言葉の断片が、耳の奥で繰り返される。

「話を聞いたとき美樹はそうですかと事務的に一言言っただけだった。あいつだけが、初めから瞬や千代の人権だとか、メンタル的な問題を気にしてたのに……」

「……」

へえ。

意外だとかなんだとか、感情は様々あるはずだが、形にならないのが実際だった。

美樹という、今の今まで存在も知らなかった人間が、いくらこちらの人権やメンタルを気にかけていたと言われても、実感が湧くもの

ではない。

ただざわりとした何かが、心のどこかを掠めていく。

もともと動かすつもりも無かった思考が、ここ数日のデータによってべったりと塗り替えられていく。死んでいる代わりに穏やかだった回路が、揺さぶられて大きく脈打つ。

今からうじて分かるのは、あの女が死んだこと、それに俺が関わっているということ。

それから、それによって瞬や市谷が傷ついているという、胸くそ悪い現実。

どく、と、自分の中に捉えどころの無い不規則な息吹を感じる。

「美樹」のことは、とりあえず、保留だ。

現状に片が付くまで。

せめて、瞬と市谷を逃がせるだけ持てば。

「ミキさんさあ、」

千代がふいに声を発する。

「綺麗なひとだったね」

それは何の含みも無いただの感想のような響きだった。



## 16・play the fool

この先ことあるごとに、千代の言う「綺麗なひと」の死を、俺は思  
い出すのだろうか。

それとも思い出す未来が訪れる前に、俺もこの訳の分からない世界  
に別れを告げているのだろうか。

「せんせえ、俺たちが逃げたら、どうなる？」

市谷が不意打ちを食らったみたいに俺を見る。

「どうつ、て……」

「そのままの意味だよ。俺たちは自由が欲しくて逃げる。俺たちの  
動機はあんたにもわかるだろう？」

俺の側の話は分かってる。分からないのは、俺と反対の立場の事情  
だ。

「……ああ、」

俺の言いたいことを計りかねる様子で、市谷は曖昧に返事をした。

「俺が知りたいのは、俺と千代をどつかの誰かさんに引き渡す取り  
引きが成立しなかったら、何が起きるのかってことだ」

それまで黙って話に参加する素振りも見せなかった千代が、顔を上  
げて俺を見た。

「瞬、それ……聞かない方が身の為ってこともあるんじゃない」

「それは聞いてみなきゃ判断できねーだろ」

「瞬……でも気付いてるんだろ、聞いたって自分の首を絞めるだけだ」  
「嫌ならお前は聞かなきゃいい」

「違う、俺が聞きたいとか聞きたくないとか、そんなことじゃない」  
千代の周りに険悪な空気が流れる。ここまで露骨に嫌そうな顔を  
した千代を見るのは初めてだった。

「なんだよ」

真つ直ぐに交差した千代の不快そうな視線に、一瞬躊躇うような揺れが混じる。

「千代、言いたいことがあるなら言えよ。ダラダラ付き合ってる暇はない」

「なあ…瞬、そんなこと聞いてどうするんだよ…今まで、…」

言いかけてそれでもまだ迷っているような千代の目は、たぶん何かを訴えてた。

でもそれが何かは分からない。

泣きそうだな。コイツ。

千代は泣いたりしないだろう。でも泣きそうだと思った。

「…千代、」

別に喧嘩したい訳でも傷付けたい訳でもない。

「なんでそんな顔してんだよ」

泣いたりしない。コイツは、こんなところで。

でも、本当に今すぐ何処かへ逃がしてやりたいくらいに辛そうだった。

一瞬俺から目を逸らして、千代がやっと口を開く。

「…、知ってどうするつもりだよ、瞬。今ままで全部裏切られてきただろ、俺たちは。」

今更良いニュースが聞けるなんて、…瞬だって、思っていないだろ…」

「ああ、思っていない」

「だったらもう、自分で自分を傷付けるような真似するなよ…」

なんで分からないんだよ、千代の表情が意味することは、きっとそんなところだったのだろう。

「全部知らなくてもいいんだよ、瞬。全部の結果を背負うなんて誰にも出来ない。…そうでしょ？」

もどかしさとか、不安とか、優しさみたいなものが、千代の瞳の中

で一緒くたになっていた。

「だからもう、知ろうとしなくていいんだよ……」

たぶん千代は、自分のことを後回しにして俺のためにこんな弱々しい言葉を紡いでいる。

そして端から冷静に見れる分だけ、今、コイツは俺より俺のことを理解している。

「知りたいんだよ」

俺がそう答えると知っていたような顔をして、千代は遠くを見つめるように俺を見ていた。

揺れるのに逸れない目だった。

「分かっている」と許すような、「分かっていた」と安堵したような、静かな諦めと温かさを合わせ持った目だった。それがどんな意味を持っていたのか俺にはわからない。でも一つ確かなのは、それを見て酷く哀しいと感じたことだ。

ああ、何かが、確実にすれ違った。

それはほとんど確信に近かった。

取り返しのつかない何かが起きた。

取り返しのつかないことなんて既に掃いて捨てるほどあったのに、  
どいう風の吹き回しかその瞬間はやたらと重たいリアリティを伴っていた。

「しょうがないなあ」

千代がぼやいた。

「……馬鹿だなあ」

俺が馬鹿だと言いたかったのか、自分のことなのか、それとももっと大きな外の世界に向けて呟いたのか、どれも当てはまりそうで、どれも違うようだった。

「取引が成立しなかったら、どうなるだろうな。とりあえずここに  
いる人間は皆殺しかな」

次の部屋へ続く扉へ向かいながら、市谷がぼそりと呟いた。千代は  
何も言わない。

「…あんたら一体どんな奴と取引する気だったんだよ」

市谷の後に続いて、俺は扉を見る。次の扉はガラス張りじゃない。  
窓も無い。向こう側に誰がいるかは分からない。

「分からない」

「は？」

「分からない。分かるのは相手が褒められない奴ってことだけだ」

市谷はそう言いながら白衣のポケットを探って一枚のカードを取り  
出し、扉の横に設置された掌ほどの大きさの機械にかざした。カチ  
リと音がする。扉の鍵が外れたらしい。

「おい冗談のつもりか？思想も信仰も分からない悪魔に、大量虐殺  
用のウイルスを差し出すって？イカレテル」

市谷はこちらを見ない。わざと俺と目を合わせないようにして、ド  
アノブに手をかける。

「ああ。いかれてるよ」

市谷の表情は硬い。

千代は黙ったまま。

「まじかよ」

「ああ」

視線を逸らしたまま、市谷が扉を開ける。

「-」

開いた扉の前に立ったまま、小さく息を呑む気配。嫌な臭いがする。

「せんせえ？何だったてん…」

「瞬」

後ろから覗き込もうとした俺の腕を千代が引いた。  
俺は千代の方へは振り向かず扉の向こうを見る。

赤。

赤。

赤。

三人。

赤い部屋だ。さっきのパネル張りの悪趣味な部屋に比べて随分狭い。  
引き出しも何も無い、足と板だけの簡素な四角いテーブルが二つ。  
そして床に、白衣姿の男が三人転がっている。転がっているのだ。  
白衣だが、白衣と呼べないほど赤い衣装を纏って。そう。この赤は  
血の色。

一人は痩せ形。一人は眼鏡。一人は、若い。たぶん、二十歳そこそ  
こだ。何の因果でこいつはこんなところに来てしまったんだろう。  
三人とも人形のように動かない。

それが何かなんて聞かなくなっただけでわかる。  
今、同じものを見たばかりだから。

撃ち抜かれた、これは死体だ。

「美樹だ……」

市谷がうわ言のように囁く。この三人を、美樹が殺した。

俺は美樹の、おそらく「ごめんなさい」と形作ったのであろう、あの唇を思い出す。

「お前たちを逃がすかどうかで口論になったんだろう。もともとよく対立していたメンバーだ」

眼鏡の男は銃を握っていた。この施設では銃の携帯が公然と許可されていたようだから、俺たちの逃亡に関わらずいつでも撃ち合える状況だったのだろう。

「だからって…」

「だからだよ。美樹にもこの三人にも一刻が命より惜しかった。美樹は迷うことさえ惜しんだみたいだな…」

確かにこの惨状が美樹の手際なら、美樹の判断と行動力が三人より圧倒的に早かったということだ。美樹は自ら発砲した一発以外、かすり傷の一つもなかった。

「あいつ。シュミレーションでもしてたかな。昔、お前を自由に出来たらって言ってたことがあったよ。俺は碌に聞きもしなかったけど、もしかしたらずっとチャンスを探っていたのかもしれない」

美樹は、感染者である俺を社会的に黙殺しようとするこの施設や、ここにいる職員を否定して、飼殺されようとしている俺に自由を与えたいと願った。市谷が淡々と零した言葉が彼女の姿を縁取る。

感染しながら生きている俺を隔離して自由を奪うことに、罪悪感があつたのかもしれない。

不条理に対する嫌悪や虚無感。こんな場所で働くには、たぶん誠実さなんて自らを苦しめるだけのものなのに。

だけど美樹はそれを持っていて、今さっき、三人を撃ち殺し、自殺した。

「耐えられなかったんだろうな…。美樹はお前を逃がしたかったんだよ」

放たれた言葉が俺の心臓に突き刺さる。

「でも勘違いするなよ。それは美樹の意志で、お前のせいではない」

「なんで…」

自分の口から零れ落ちた声が、まるで別の次元で放たれたように遠く聞こえる。

「おかしい、だろ…こんなの…逃がしたいなんて、言っただけ…」  
俺が生きる為に、人が死ななきゃいけないのか？俺のせいじゃないなら、一体どうしてこんなことになった。

もしも美樹が市谷の言うとおり俺を逃がすチャンスを狙っていたなら、そのきっかけを作ったのは、やはり俺自身だ。美樹は間違いない、俺が逃げる意志を見せたから、行動したのだ。

「瞬、千代、行くぞ」

市谷が低く言う。

「せんせえ…」

「これでおまえたちが逃げなかったら、全部無駄になる」

「それは、わかってる…」

わかってる、けど。

「瞬、行こう」

千代に静かに促されて、俺は血だまりに足を踏み入れる。  
ぴしゃんと靴の裏で踏んだ赤い液体が跳ねて、広がった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3841c/>

---

Emerging Disease

2011年1月26日19時10分発行